龍鬼が討つ　龍に選ばれし物の系譜

マガガマオウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

永く栄華を極めた帝国は欲に塗れた亡者の蔓延るこの世の地獄と化していた……。

そんな暗黒の時代の影で、天が裁けぬ悪を狩る暗殺者たちが居た……。

後の時代、記録にこそ残らぬが人々の中で語られた龍鬼の異を名持つ男達の物語……。

目次

兄を追って……。 ―――― 1
影差す国の闇を知る ―――― 55
殺し屋としての教訓～タツミの初仕事～ ―――― 91

兄を追って……。

人が集まり集落となり、集落が集まり街となり、街が集まり国となる……。
国が集まれば争いが起き、より強き力を人は求め……力を得れば、弱きより富を奪う。
奪いし富で国は栄え、人は豊かな安寧を享受する……。
国栄えれば光が生まれそして人に闇が差す……永き時は、人に際限なき欲を与え安寧は腐敗に変わる。
人が欲に溺れ人を喰らう魑魅魍魎となる時代、世にはその亡者を喰らう獣が現れるのは必然であった……。

帝都にほど近い街道に二人組の男が物資を乗せた馬車を帝都まで進ませていた。
「ん？」
帝都とは、目と鼻の先ほどの距離であり通常通りであれば平穏に物資を運ぶ事が出来たが残念ながらそう上手くは事は運ばないようである。
「……土……土竜だぁぁぁぁ！」
「こんな街道に出るなんて聞いてないぞ、逃げろぉぉぉ！」

すぐ目の前の地面に亀裂が奔り裂けた地面押し上げて巨大な昆虫の様な生物が姿を見せたのである。
その姿を見た二人は積み荷には目もくれず一目散に逃げ出した。
【ヴォォォォォ！】
「ギャアアアア！」
しかし土竜と呼ばれたこの生物は表情は判別しにくいが二人を獲物として標的に定めたらしく巨大な前肢を伸ばして襲い掛かる。
「人助けと名前売り同時に出来そうだな！」
二人の命運も尽きかけたかと思われたが、土竜の巨体に恐怖する素振りも見せずに背に抱えた剣の柄に手を伸ばし猛然と向かう一人の年若い人影が見えた。
目にも止まらぬ俊足で土竜との距離を詰め一太刀で触角を切り落とす。
「！」
その光景に思わず足を止めた男たちが、この少年と土竜の勝負の行く末を固唾を呑んで見守っる。
足を止めたしまうと自分たちが危機に晒されるという事実を忘れ、その戦いに引き込まれたようにただ佇んだのである。
「一級危険種土竜か……相手に不足はないな……。」

構えを崩さずに相手を見据えそう言い放つ。
【ヴォァァァァ！】
土竜の方は、思わぬ方向からの不意打ちに苛立ち怒りの声を上げた。
「怒ったな。」
普通の人間であればこの怒気を露わにした雄叫びに怖気づき足を竦ませるものだが、この少年に至ってはその分類に当てはまらなかったようである。
目の前の狼藉者に天誅を下さんと言わんばかりに、前肢を振り上げ少年の居た場所に振り下ろした土竜は舞う土煙の中から振り下ろされた前肢を駆け上る少年に一瞬気を取られる、慌てて振り上げた方とは別の前肢で振り払おうとするも上へ跳んで避けられる。
「終わりだ！」
着地と共に身を屈め勢いよく跳び上がると素早い連撃で土竜を切り刻み決着をつけた。
「す……凄い……！」
間近で勝負の決着を見ていた二人が何方ともなく呟いた。
「凄かったぜ少年！」
「まさか危険種を一人で倒してしまうなんて……！」

呆気に取られる内に地面に着地した少年に興奮した様に駆け寄る二人。
「ふっ……当ったり前だろー！兄貴に比べればあんな奴楽勝だって！」
おだてられて上機嫌になったのか、少年は得意げに話し出した。
「ちなみに俺はタツミって言うんだ！帝都で有名になる男の名前だから覚えておいた方がいいぜ！」
「！」
少年、タツミの軽いノリに少しばかり呆れ顔をしていた二人ではあったが彼の後半の発言を聞いて表情が硬くなる。
「アンタもしかして、帝都で一旗上げようってのか？」
「おう！帝都で出世！田舎者のロマンだぜ！」
恐々としながらも彼にそう尋ねた男の質問に、威勢よく答えるタツミ。
「……。」
しかし帰ってきた反応は芳しくなかった。
「……なんだよ？」
二人の何とも言えない感情が表に出た表情に、思わず調子を崩されてしまう。
しばらくの無言の後、一方の男が物々しい語り方で話し出した。
「帝都は……君が思うような夢のある場所じゃないぞ、賑わってはいるがこの土竜より

タチの悪い化物が一杯いるんだ……。」
「なんだよ……街中に危険種でも出るってのか？」
「人だよ……。」
「人？」
「人だけど心は化物……そんな連中ばかりなんだ……。」
「ふぅむ？」
その話の内容を、タツミは上手く理解できず聞き返してみるがいまいちよく理解出ない。
「まぁ、忠告は有り難いけど今更引き返す訳にもいかねーよ。俺が……俺達が……帝都で稼いで村を救うんだ！それに、帝都の軍には俺の兄貴も居るしな！」
理解できないなら仕方ないと施行を切り替える事にしたタツミは帝都まで続く道をまた進み始めた。

目の前に故郷の村に居ては見る事が出来ない景色が広がっていた。
「はーー！すげーっ、ここが帝都かぁ！」
国の中心地と呼ぶにふさわしい景観と気品が田舎から出て来たばかりの少年には輝いて見えた。

「こりゃ出世すりゃ村ごと買えるな！せっかく兵舎に行かねーと！」
「……。」
完全に煌びやかな気風に当てられ小さな子供の用に意気揚々と兵舎に歩みを進めたタツミの声を、近くで聞いていた人物がいた。
「アーお前も入隊希望者か……んじゃこの書類書いて俺ん所持ってきな。」
視線を忙しなく彷徨わせながら兵舎に辿り着いたタツミに、覇気のない煤けた面持ちの係員が事務的に書類を差し出してきた。
その書類を手にしたタツミは呆気の取られた顔で、渡された書類を見る。
「……これって一兵卒からスタートってこと？」
「当然だろ？しかも大抵辺境行きだ。」
「そんなのんびりやってられるか！俺の腕を見てくれ！それで使えそうなら兄貴の部隊に仕官させてくれよ！」
事もなく返ってきた返事に、タツミは威勢よく啖呵を切る。
だがその返答は、兵舎から締め出されるという結果で示された。
「なんだよ試すぐらいいいだろ！」
自分の実力に自信があったタツミは、試されもせずに追い出された事に遺憾の意を示す。

しかし係員にも言い分はあった、否正確には軍の切実な内部事情だった。
「ふざけんな！兵士になるのすら抽選が必要なんだ！この不況で希望者が殺到してんだよ！いちいち見てられっか！雇える数にも限界があるんだよ！」
「え……そうなの？でも、兄貴の部隊は人手が足りないって前の手紙に……。」
「誰だよ⁉そんないい加減なこと書いた兄貴は⁉名前を教えろ後でとっちめてやる！」
「イッセーだ。」
「なん……だって？今だれの名を……。」
タツミが自分の兄の名前を口にした時、係員の顔色と声音が変わった。
「だから、俺の兄貴はイッセイだ！」
反応の鈍い係員に苛立ち、今度はよく聞こえるように声を出した。
「まさか……お前がイッセイさんが言っていた弟か……。」
口調が重くなりたどたどしくなる、よく見ると顔色も悪い。
「！やっぱり兄貴を知ってるんだな！だったら……！」
だがタツミは、兄な名が知られていることに喜びの感情を声に出して係員に話しかける。
「悪いが、その人はもういない……大分前に死んだよ任務でな……。」
「？何いてるんだよ……兄貴が死んだなんて……嘘だよな！冗談だよな！……だって、

兄貴は村で一番強い男だったんだぞ！どんな危険種にだって負けたことが無い人なんだぞ！」

係員の話が信じられず、覚束ない足取りで詰め寄ると泣き叫ぶように訴えた。

「本当だ……とある脱走兵の捜索で、その脱走兵と交戦して……。」

「っ！誰だよ！そいつは、そいつの名前は！」

「知って……どうする？」

「どうするって、決まってんだろ！」

「仇を討つか⁉お前が言った、一番強い男ですら勝てなかった奴に！」

「それは……。」

係員の感情が籠った眼差しは、一瞬の怒りで我を忘れたタツミを迷わせた。

「成程な、直ぐに熱くなって周りが見えなくなる。イッセイさんが、最後まで自分を殺した奴の名を明かすなと言明するわけだ。」

「え……？」

「確かに、イッセイさんは強かった。通常通りのあの人なら負ける事は無かった……でも、あの日のイッセイさんは……これ以上は、話せない故人と約束だ……。」

「それでも……俺は！」

「今日の所は見逃してやる、早く故郷に帰れ……。」

その言葉を最後に係員は兵舎の戸を閉め切った、後に残されたタツミは喪失感を振り払えずその場に唯うずくまる事しかできなかった。

兄を失った、それもタツミにとって生涯敵う事のない憧れであり目標とする人物だった最高の兄イッセイを自分があずかり知らぬうちにである。

「畜生……俺はどうすれば……？」

「やあ少年、大丈夫かな？」

一人この世に取り残された絶望感が立ち上がるための気力すら霧散させていたタツミの頭上に、何者かの影が重なり同時に若い女の声が聞こえてきた。

「あんたは……？」

「あたし？あたしはただの通りすがりだよ、それより何かお困りかな？お姉さんこう見えても顔が広いんだ、もしかしたら力になれるかも。」

項垂れた顔を上げ自分を見下げている人の姿を確認すると、整った体型の若干怪しい雰囲気を滲ませた女性が立っていた。

「本当か⁉じゃあ人を探してほしいんだ！」

「分かった分かった、じゃあ一旦落ち着ける場所に行こうか話はそこで聞くよ。」

タツミはその女性に藁にも縋る思いで迫った、何としても兄の仇の正体を知りたかった、その為なら悪魔にだろうと鬼にだろうと首を垂れる。

その後、酒場の様な場所に連れてこられ事情を説明するタツミ。
「成程ね……お兄さんを殺した奴の正体を知りたいと……。」
「あぁ！どうしても知りたいんだ、あの兄貴を殺すほどの手練れだし、どんな奴か知らないけどさ……でも！」
「仇を討ちたい……それが無理ならせめて一矢報いたいっと……分かったよ、そう言う事なら協力してあげる！」
「ホントか！」
「ほんとほんと……でさ、探すにして先経つものがないとさ……。」
「先経つもの？……あぁ、金かならここにこれだけ……。」
手荷物の中から、金銭で膨らんだ麻袋を取り出しテーブルの上に置く。
その金は、タツミが帝都まで道中で危険種などを討伐して得た報奨金であり当分の活動資金に充てるつもりでいた命銭でもあるが、今のタツミには兄の仇の正体を知りたい言う願いの為に惜しむつもりなど無かった。
「これは不味いな……以外にお金持ちだね、どうやってこんなに稼いだの？」
「兄貴に危険種の仕留め方を仕込まれてな……クソッ！何でだよ兄貴！」
「本人ぽいな……少年の思いは理解した！でも、調べるだけならこんなに必要ないかなぁ。」

そう言うと女性は麻袋から三分の一程取り出した。
「この位あれば、大体の情報は仕入れる事が出来るから、後は大事にしまっておきなよ……最後に忠告しとくね、よく知らない人を簡単に信用しない事！」
「……はぁ？」
「あぁぁぁ！もう、そう言う所だよ少年！今、君はよく知らない私を簡単に信用して挙句に大事な軍資金を取られてる、君みたいなお人好しは早く帝都を離れた方がいい。」
「何言ってるんだよ？取られたも何も、あんたはまだこの場所を離れてないだろ？」
「だ～か～ら～！離れてからじゃ遅いの！ここじゃあ、騙す奴より騙される奴の方が悪いんだから！副長が心配するわけだよ……。」
「何だって？」
「兎に角！何か分かったら伝えるから！君は早くこの帝都から離れるんだ！」
そう言い残し、その場を離れる女性の背を見送りながら、最後の言葉の意味を考えるタツミではあったが結局その場では理解するには至らなかった。
その後も、情報収集を続けていると別の人間が情報集めを手伝うと言って金銭を求め疑うこともなくその都度渡していった結果、タツミは無一文になってしまった。
「……あの忠告の意味って、こういう事だったのか……。」
この状況になって初めて、最初に会った女性が如何に親切だったか理解できた、あの

人は渡した金を黙って持っていけばばれなかった筈なのにわざわざ残って忠告してくれたのだ、恐らく情報集めも真面目にやってくれているだろう、それを考えれば最初の出費は割といい勉強代だった。

「この状況になってからじゃあ、折角の忠告も意味なしだけどな……今夜は野宿かぁ、兄貴の事もそうだけどサヨとイエヤスとも合流しなきゃな……。」

今夜の宿代も無くなってしまったタツミは、道の端に座りこれからの事を考えながら寝に付こうとした。

「止めて！」

だがそんな状況でも親切な人間はいた、道に座り込むタツミに気が付いた値の張りそうな服装の少女が乗っていた馬車を止めさせた。

「泊まるアテがないのかなあの人……気の毒に……。」

「またですかお嬢様？」

「仕方ないでしょ、性分なんだから。」

馬車に乗っていて少女は護衛の従者に手を借りて下りると、タツミのもとまで歩み寄る。

「……ん？」

微睡みの中で近くに人の気配を感じたタツミは、薄目を開けて近づいてきた人物を確

かめる。
「地方から来たんですか？」
「あ……？ああ……。」
目の前に立つ少女に聞かれ、タツミは多少警戒しながら質問に答えた。
「もし泊まるアテがないんだったら、私の家に来ない？」
現状無一文のタツミにとっては願ってもない申し出だが、帝都に来てから最初に会った女性以外碌な人間に出会ってなかった彼は疑心暗鬼になってしまっていた。
「俺、金持ってないぞ……。」
「持ってたらこんな所で寝てないわね。」
もっともな意見だ、だが見ず知らずの人間を簡単に使用してはいけないと教えてもらったばかりの時に有り金全部取られたタツミはいまいち信用できない。
「アリアお嬢様は、お前の様な奴を放っておけないんだ！」
「お言葉に甘えておけよ。」
答えを出さずに考え込んでいるタツミを見かねて、護衛役の従者が少女を援護した。
「……まぁ、野宿するよりゃいいけどよ……。」
「じゃあ、決まりね。」
警戒していたタツミは遂に絆されて少女アリアの提案を受け入れ、彼女の自宅に招か

れた。
「おお……!?」
タツミはこの帝都に来てから、何度目になるか分からない驚きの声を上げた。
アリアの家は、屋敷と呼ぶに相応しい広さと豪華な調度品で飾り付けられていて、今まで故郷の村でしか暮らした事のないタツミにとっては別世界の光景だった。
「おおっアリアがまた誰か連れて来たぞ?」
「クセよねぇ、これで何人目かしら?」
その屋敷の一室で優雅にお茶を飲む夫婦が、タツミに視線を向けて会話を交わす。
そんな会話は耳に入らない程、タツミは興奮して辺りを見回している。
『!あのオッサン達凄く強ぇ……こういう人達がいるから得体の知れない俺にも優しく出来るのかな……。』
この屋敷と思われる男性の後ろで佇む二人の護衛役を見て、その実力を推し量るとこの家に暮らす家族の人柄の良さを推測できた。
『それにしているんだなぁ帝都にも、こんな優しい人達が!!』
ここまでの出来事で、酒場の出会った女性も親切な部類の人間ではあったが、その親切さも金銭が絡んでいた。
無償でここまでしてくれるのなら、この家族は良心に溢れた人徳者なのだろうか、な

らば礼の一つもしなければならないと思い直した。
「ひろって頂きありがとうございます‼」
「いいよいいよ，遠慮無く泊まててって。」
「ハイ‼」
　自身の運の良さもあったのだろうが、それだけではこんな優しい家族に会う事は出来なかっただろうと、タツミは偶然の出会いに感謝した。
「人助けをすればいずれ私達にも幸せが帰ってくるものね。」
「お母さん！アリアはそんなつもりじゃないよ‼」
「冗談よ冗談。」
「あの……ついでに一つお願いしたいことがあるんですが……。」
「「？」」
　図々しいかとも思ったが背に腹は代えられない、これからの事も考えダメ元で話をしてみる事にした。
「成程、軍で出世して村を救いたいか……。」
「ハイ。」
「素敵な夢ね。」
　己の願望は確かに兄を殺した仇を探し出すことだ、だが当初の目的も蔑ろには出来な

かった。
　昨今の帝国ひいては辺境の実情は何処も芳しくなかった、重い重税に作物の不作などが重なり各々多少の差はあれど困窮しているところばかりであった。
　タツミの故郷でも、頼みの綱だった兄イッセーからの仕送りで何とか日々を凌いでいた程で、貧しく苦しい生活を送っていたタツミ達はイッセーに続こうと帝都に出て来た訳である。
「……だがね君、帝都の内部は平和だが……この国は三方を異民族に取り囲まれている。国境での彼等との戦いに狩り出されるかも知れないぞ？」
　アリアの父は、タツミを気遣って忠告してくれた。
「覚悟は……しています……何より、兄貴も通った道ですから……。」
　しかし、タツミの意思は揺るがず決意を告げた、何よりも敬愛するイッセイも帝国の為に戦い殉じたのだ、自分だけが安全な場所には居たくなかった。
「兄貴？君はお兄さんが、帝国軍人だったのか？なら、そのお兄さんを頼ったらどうだね？」
「……兄貴は死んでました、俺が知らないうちに……。」
　アリアの父の疑問も最もだ、タツミも当初はそのつもりだったし一緒に村を出た二人の仲間もイッセイの元に居ると思っていた。

「……それは済まなかったね……。」
拙い事を聞いたとアリアの父は、沈痛な面持ちで謝罪してくれた。
「いえ、気にしないでください。」
「ところで、そのお兄さんと言うのは誰だったのかな？もしかしたら、知っている兵士かも知れない。」
気を取り直させようとイッセイの事を聞いてくるアリアの父に、タツミは何度目か分からないセリフを語った。
「……イッセイです。」
「！……これは驚いた、あの龍鬼イッセイの弟とは……。」
イッセイの名を聞いたアリアの父は、驚愕した表情でタツミを見た。
「龍鬼？」
「知らなかったのかい？君のお兄さん、イッセイ将軍の異名だよ。」
聞き慣れない言葉に首を傾げたタツミに、アリアの父は意外な様子で彼の知らない事実を口にした。
「将軍⁉兄貴は将軍になっていたんですか⁉」
だがタツミがその話の中で一番驚いたのは、兄が帝国軍で将軍だったことである。
「……知らされてなかったんだね。」

「……はい。」

兄は弾にしか手紙がよこさない為、ただ金銭のみが送られてくる事が殆どだった、だから将軍に出世したことも生死の所在すら知らなかった。

「彼が龍鬼と呼ばれるようになったのは、彼の戦い方に由来しているんだよ……常に最前線でそれも誰よりも前に出て戦い退くときは誰よりも後ろ居る、戦う相手はどれも猛者とされてきた強敵ばかりそれらをほぼ一人で引き受け渡り合うどころか圧倒して仕留めた腕……それは最早、人の範疇を超え龍や鬼と言った怪物と言われた方がしっくりくると噂が流れてね、実際に帝国軍の中でも手練れの将兵と模擬戦を行ったが結果は噂に違わぬ実力だったらしい。」

「そう……ですか。」

そんなタツミを不憫に思ったのか、アリアの父は異名の詳細を説明してくれたが、タツミの表情は晴れず寧ろ暗くなるばかりだった。

「……それで、タツミはその村から一人で来たの?」

立ち込めた重い空気に耐えらず、話題を変えようとアリアは別の質問をタツミに投げかけた。

「いえ、三人です……実は……。」

話題が変わったからかタツミは帝都来る前の事を思い出しながら、ここまでの経緯を

話し始めた。

タツミの故郷、そこは雪深い山間の寒村だった聳える小高い山々の合間に村民の家が疎ら建つだけの小さな集落で、イッセイがまだ居た頃タツミ達は彼の狩りに同行して兄の戦い方を学んでいた。

そして、十分に力が付いたと感じ始めた頃に漸く村長からの許しを得て、イッセイを頼りに帝都へ向かう事にしたのである。

「んじゃ、行ってくるぜ村長!」

夢と希望に溢れこれから向かう帝都に憧れを抱く三人の若者が居た、彼らの表情どれも明るく特にタツミは兄に会うのが待ち遠しいのかそれとも、これから切り開いていく輝かしい未来に胸を躍らせているのだろうか、兎に角年相応の少年らしい笑顔を浮かべていた。

「うむ……幼い頃から高めあってきたお前達じゃ、その腕で出世のチャンスをもぎ取るんじゃ。」

「任せてよ! 村を豊かにして見せるわ!」

「そうすりゃ飢えて死ぬこともないからな!」

そんな三人を送り出す村長の言葉に、サヨとイエヤスは力強く答えた。

「まぁ、このイエヤス様の名が知れ渡るまで１０年てところだな。」
「イエヤスはきっと規則守れなくて打ち首ですよ。」
　よほど自分の腕に自信があるのかイエヤスは、鼻息を荒げながら自信過剰気味に言い放つが、すかさずサヨが横やりを入れて窘める。
「サヨ！手前ェ！ありそーなこと言うんじゃねぇよ‼」
「自覚してんなら寝坊か方向音痴、どっちか直しなさよ！じゃないと、イッセイさんに迷惑かけちゃうじゃない。」
　サヨの言葉に出鼻を挫かれ顔を青くして声を荒げたイエヤス、売り言葉に買い言葉サヨは的確な反論で二の句を潰すが後に続いた言葉には乙女的なニュアンスが混じっている気がする。
「元気は充分なようじゃな……。」
　そのやり取りを横目に呆れた顔で二人を見ていたが、そろそろ出発した方がいい頃合いになってきた、村長は別れの言葉の変わりと懐から手に持てるほどの大きさ何かをタツミに手渡した。
「ではタツミ……最後の餞別じゃコイツを持っていけ。」
「いざとなったらこれを……売るんだな。」
　渡されたのは木製の人形だった、何かの宗教のご神体だろうか人に似た形だが各所の

造詣が違った。
「違うわ‼」
タツミの罰当たりな発言に思わず声を荒げて否定した後、彼の身を案じながらもこれからの活躍を期待しているのだろう視線を向けた。
「肌身離さず持っていろ、きっと神様が助けてくださる。」
「ああ……！ありがとな村長！んじゃ、行ってくるぜ！」
村長の気遣いの礼を言うと背を向けて片手を上げ、力強く帝都へと歩き出した。
「とまぁ……そんな感じで意気揚々と……その後、夜盗に襲われて散り散りになったんです……。」
「まぁ……。」
「アイツ等強いんで心配はしてないですが……ただイエヤスって奴が凄い方向音痴なんで、集合場所の帝都までたどり着けるかどうか……。」
こちらもこちらで中々重い、だが生きている可能性がある分希望は持てる、今は一刻も早くはぐれた仲間と合流して体制を整えたい。
「よかろう！軍の知り合いに口添えしておこう、あとその二人の捜索もな！なに、今の軍部にはイッセイ将軍に恩がある人間も多い、言って否と言う奴はいないさ！」

「ありがとうございます！」
　事情を聞いたアリアの父が願っていたセリフを言ってくれた、タツミは感銘を受けたいい声で礼を言った。
「アリアの勘って当たるんだけどね、きっと近い内に二人共会えると思うよ。」
「アリアさん……。」
　さらに続けてアリアも仲間との再会を祈ってくれているようだ、タツミはこの時世にもこんなにも良識に溢れた人徳者が居たのかと思った。
「よし……じゃあこの辺にしておくか……。」
「あの……ここに居る間、俺に手伝えることってありませんか？」
　アリアの父は話が纏まったの見計らってこの場を離れようと腰を上げた。
　だがここまで親切してもらっておいて、何もお返しが出来なていないタツミは働きで返そうとそう提案した。
「あっ、じゃあアリアのごえいをしてよ他の人と一緒に！」
「それはいいガウリ君頼んだよ！」
　アリアが反応を示し提案に応答すると、彼女の父は同意して護衛の一人に指示を出した。
「……分かりました。」

指示を受けた護衛は感情の見えない厳めしい表情で返答する。
「今日は何から何まで、ありがとうございました！」
「助け合いよ、貴方も誰かに良いことをしてね！」
改めて今日の親切に礼を言うと、何でもない当然の事のしたと言うかのように返した。
「ハイッ！」
この家族の気の良さに感動を覚えつつ、この屋敷に来て一番いい返事をした。

その後、簡素ではあるが整えられた部屋に案内されたタツミは夜の帝都の景色を眺めながら今日一日の出来事を思い返した。
『最初はどうなる事か思ったが……ついてる、良い人達に助けられたな。』
最初に声を掛けてきた人には忠告を受けたが、聞かなかったせいで一度はかなり際どかった、でもその後に出会ったアリアの家族は紛れもなく善人だった。
『後はさヨとイエヤスだな、二人共無事に帝都に着いてるといいんだけど……。』
行方の判らない二人を案じつつ、ゆっくりと眠りについた。
一夜明けた朝、帝都の民で賑わう町の中で……。
「次はあの店に行くわよ!!」

「お待ちくださいお嬢様!!」
　無邪気に目を輝かせ買い物を楽しむアリアと、その後ろを両手に買った物が入った箱を大量に抱えた護衛の姿があった。
「次は俺達が留守番のようだな……。」
　その光景をもう慣れた様に見て呟くガウリと呼ばれた護衛そして、衝撃が抑えられず驚愕の表情で見ていたタツミが居た。
「お嬢様の買い物って凄いんですね……もうなんか量が面白くなってますよ。」
　思わず荷台に積まれた買った商品の山を見て、驚きと恐ろしさをにじませた声が出る。
「お嬢様に限らず、女ってのはみんなあんな感じだ。」
　だがタツミの言葉に、妙に達観した雰囲気でガウリは返した。
「そうスか?俺の知り合いは着物はすぐ選ぶんですけど。」
　しかし、あまりそういった女性と係わったことも出会ったことも無いタツミにはよく理解できない話だった。
「それより上を見てみろ。」
「え?」
　唐突に視線を上げたガウリにつられてタツミも顔を上げて視線の先を追った。

「あれが帝都の中心……宮殿だ。」
そこにはこの帝都の中でも一際巨大で荘厳な建造物があった、宮殿の名に恥じぬ豪華絢爛な姿は田舎から出て来た人間には圧倒的過ぎて気圧される。
「でっけぇ……!!あれが国を動かす皇帝様のいる所ですか!!」
思わず声が大きくなるタツミ、その視線には宮殿の威容に驚きつつ自分たちの国の君主の住居が輝いて見えた。
「いや……。」
だが無邪気なタツミの反応のとは裏腹にガウリの声音は重苦しい。
「少し違う……皇帝はいるが今は子供だ……その皇帝を影で動かす。」
途中まで言いかけ、ガウリは何かを気にして周囲を視線を写し警戒する。
「大臣こそがこの国を腐らせる元凶だ。」
「!?」
暫く注意深く見回した後、徐に続きを語った。
この帝国の腐敗の中心人物が皇帝の腹心であると知らされ、タツミは息を呑む。
「おっと、変な声を出すなよ? 聞かれれば打ち首だ……イッセイさんには生前返し切れない恩をうけたからな、弟のお前には教えておこうと思った。」
無駄に正義感があるタツミは声を荒げかけたが、すんでの所でガウリに口を押さえら

れ未遂に終わった。

「……じゃあ、俺の村が重税で苦しんでいるのも……。」

ガウリの忠告で冷静になると感情を抑えた声で、自分の故郷の現状その原因を聞いた。

「帝都の常識だ……。」

出来れば否定してほしい話だったが、返ってきたのは虚しいほどに残酷な現実だった。

「他にもあんな連中もいるぞ。」

そう言うと今度は壁に貼られた手配書に視線を送る。

「……ナイトレイド?」

そこには数人の顔写真と共通の組織の名前が書かれていた、年齢も性別も様々だがそこだけが同じであり異様に目立つ。

「帝都を震え上がらせてる殺し屋集団だ、名前の通り標的に夜襲を仕掛けてきやがる帝都の重役達や富裕層の人間が主に狙われている、一応覚悟はしとけよ。」

「ハイ!」

アリアの家族も富裕層に当たる、話が本当ならナイトレイドに狙われる可能性は大いにあったが故に、ガウリは忠告してくれたのだ。

その心意気に感動しつつ、気概にあふれた声で返した。
「あと……とりあえず、アレなんとかしてこい。」
「へ？」
さっきまでの危機的な雰囲気が消え、別の焦燥を浮かべて視線と指でタツミに指示を出す。
「！なんの修行ですか‼」
大人二人が持って漸く持ち運べるサイズの箱を抱えた護衛を引き連れたアリアを見て、今まで言わんとしてきた突っ込みが飛び出した。

夜、月明りのみが照らし靴音だけが武器に響く薄暗い廊下を、にこやかに満面の笑みを浮かべ一冊の日記と思われる物を手に何処かへ向かうアリアの母の姿があった。
「さぁて……今日も日記をつけようかしら……。」
手にしたハードカバーの日記を眺めながら婦人らしい言動ではあるが、彼女が居る場所が悪いのか怪しい雰囲気が滲みだしていた。
「ふふっ、やめられないわねこの趣味は……。」
日課なのだろうか軽い足取りで目的の場所へ向かおうとした……。
「え……？」

しかし、日々の楽しみを送る筈の彼女は……下半身と上半身に分かれ辺りに夥しい量の流血をまき散らしながら絶命した。

彼女の胴体があった場所には、人など断ち切れるであろう巨大な鋏が刃があった……。

そしてその鋏を持つのは、アリアの母の返り血を浴び衣服を赤く汚した年若い眼鏡が似合う女性だ。

「すみません。」

何に対しての謝罪なのか、殺めた事だろうかそれとも……感情の見えない目で眺めると上下に分かれた亡骸に軽く頭を下げる。

「！なんだ……？殺気⁉」

昼間の疲れで気持ちよく寝ていたタツミは、今まで感じたことも殺気を感じて跳び起き部屋を飛び出した。

タツミの脳内では、昼間ガウリから聞かされた話がフラッシュバックし、その時の映像と共に再生されていた。

【帝都を震え上がらせてる殺し屋集団だ……帝都の重役達や富裕層の人間が命を狙われて……】

『まさか……！』

悪寒がタツミを急がせる、最悪の想定が杞憂であればと思いながら警護対象のアリアの元に向かう。

「!……アレは……殺し屋集団(ナイトレイド)!!」

その途中、ふと状況を確認するために窓に目を移すと、月を背にして細い糸の様な物を足場に宙に立つ五人組が見えた。

その中の数人の容姿には覚えがあった、そうあれは手配書に載っていた顔写真と同じ……。

「富裕層だからってここも狙うのか⁉」

『俺は……どうする⁉加勢に行くか……護衛に行くか……⁉』

タツミの視界の端では護衛の武官たちが迎撃に急いでいる、彼らに手を貸すかアリアの元に急ぐか判断に迷った。

「護衛三人、標的だぜアカメちゃん。」

「……葬る。」

「⁉」

タツミが悩む間も事態は進む、ナイトレイドのメンバーが現れた護衛を確認して短い会話を済ませると足場を降りた、黒髪に長髪が特徴的な少女と鎧姿の大男が護衛達と対峙して睨み合う。

「……いいか、あの刀に少しでも触れるなよ。」
黒髪の少女の持つ刀に必要以上に警戒しているかと思えば次の瞬間には攻勢を仕掛けたが、しかし相手が悪いかった……振るったのはただ一太刀だけ一撃を首に受け血が溢れ出す。
後の続く二人の内の一人は、大男の持つ槍に心臓を刺し貫かれ動きを止める、そして喉を斬られた護衛はまだ息があった受けた傷は致命傷ではなかったのか？
「!.心根も腐っていた自分には……当然の……報いか。」
否、その一太刀は……確かに護衛の命を奪う一撃だった、受けた傷から梵字の様な斑点が広がり絶命した。
「……なっ何なんだよコイツ等……!.化物過ぎる‼」
一連の様相を見ていた生き残った一人は命惜しさに役目を捨てて逃げ出した、だがその逃走はかなわなかった直後に後方から額を撃ち抜かれたからだ。
「情けないわね、敵前逃亡なんて。」
「いやーアレは普通逃げるでしょ。」
撃ち抜いた狙撃手の少女は逃げ出した護衛をなじるが、後ろに控えていた少年は同情を向けた。
その光景を目撃したタツミの顔は青く、起きた現実をうまく処理できない。

『一瞬で全滅!!』

惨状を目にして恐怖が思考を狭める、ならば考えることを止め今向かうべきアリアの元へ走り出した。

『せめてアリアさんを守らないと!!!』

タツミがアリアの元に急ぐ頃、屋敷の別の場所では屋敷の主であるアリアの父が頭や腰に獣の耳や尻尾と言った特徴のある女性に首を絞められ後数刻で命が尽きようとしていた。

「ぐ……う……た……助けて……娘が……娘が居るんだ……!!」

「安心しろ、すぐ向こうで会える。」

気道が締め付けられ息が苦しいのかきれぎれ口調で許しを請うアリアの父、しかし請うた相手は殺し屋……無慈悲にその願いを挫かれる。

「娘まで……情けはないのか?!」

「情け……?!意味不明だな。」

無情とも言える女性の冷酷な瞳が、絶望に染まったアリアの父の表情を移した。

首を掴む手に力が籠められ首の骨が軋み出すと、いよいよ最後の時が刻まれ出す。

「待て……。」

「……副長?!」

その時の針を暗がりから現れたフード付きのローブに顔全体を覆う仮面の出で立ちの男が止めた、その男が現れた事が意外だったのか女性は思わず手を止めた。
「その男には聞きたいことがある、殺すのはその後にしてくれ。」
「けどさぁ……。」
アリアの父を余所に彼らは内輪話を始める、どうやら彼にはアリアの父に要があるようで女性に待つように言っている。
「ボスには、俺から説明する。」
「……分かったよ。」
「がっ！……かはっごほごほごほ！」
最終的に女性が折れて首から手を放した、急に手を離されので受け身を取れずに崩れ落ちてへたり込むと急に入ってきた空気にむせるアリアの父。
「た……助かった！君、何か礼を……ひぃ！」
「礼はいい……ただ質問に答えろ。」
呼吸に苦しみながらも助けられた事に感謝を述べようとするアリアの父、しかしその続きを言う前に仮面の男は県の切先を彼の喉に突きつけ冷酷な声でせかした。
「なっ何だ！何が聞きたい！私に答えられる事なら何でも話す！」
命が惜しい彼は、怯えながら捲し立てた。

「お前たちにしか聞けない質問だ……数か月前、若い二人組の男女が帝都に来ていた筈だ、何処にいる？」
「誰の事を言っているんだ？」
　聞かれたのはよく知らない人間の所在だった、そもそもこの帝都には毎日数え切れない人間がやって来る、それこそ掃いて捨てるほどだ、そんな中でたった二人の若者の所在など知る筈もない。
「黒い長髪の女と頭にバンダナを巻いた男、兵士のイッセイの知り合いだと名乗っていた筈だ……。」
「！まさか……。」
　仮面の男が話したその二人の特徴を聞いて思い当たる人物でも居たのか、アリアの父は驚いた表情を見せると黙り込む。
「知っているんだな、何処にいる？」
「う、離れの倉庫だ！二人ともそこにいる本当だ！」
　その様子を見ていた仮面の男はさらに詰め寄り所在を聞き出す、男の迫力に押されアリアの父は慌てて返答した。
「……そうか、では……。」
「たっ助かった……ごふっ⁉」

仮面の男は二人の所在を聞き出したがその居場所を聞いて何かを察した、延命できたと思ったアリアの父は仮面の男の様子を気にする余裕もないのか束の間の安寧を感じていた。

そして落ち着こうとして深く息を吸い込んだ時の刹那の間、喉に焼くつく様な熱さを感じ一拍置いて逆流した血が軌道を塞いだ。

「な…ぜ……。」

「理由なら、お前たちがよく分かってる筈だ……。」

肺が血で満たされるまでの僅かな時、自分を殺した仮面の男にかすれた声で要領を得ない問いかける。

返ってきた答えも漠然としたものだったが、その答えに納得できてしまったのか何かを悔いるような表情で息を引き取った。

「……行くぞレオーネ。」

「……あぁ。」

この惨状の中でもこの時は静寂が場を支配した、否……真に場を支配していたのは仮面の男だった。

「お嬢様早くこちらに!」

「どうなってるの⁉」
　混乱の最中でも主人を逃がすために護衛は奔走していた、その後ろを状況を汲み取れきれないアリアは混乱気味に問いかけた。
「とにかく離れの倉庫へ、あそこなら安心です！」
　だが質問に対する答えが返ってくる事は無く、焦りを前面に出した様相で安全な場所への避難を優先する。
「見つけた！アリアさん‼」
「タツミ!!!」
「丁度良いところに来た、俺達は倉庫に逃げて警備兵が来るのを待つ！その間敵を食い止めてくれ‼」
「いいっ‼それは無茶ス……あっ。」
　如何にかタツミもアリアの元に辿り着き護衛に加わろうとする、しかし警護に付いていた護衛に無理な注文を受けたじろいでいだ、更にはまるで図ったようなタイミングで殺し屋まで現れる最悪の状況が出来上がっていた。
「クックソ、こうなったらやるしかねぇ！」
「……標的ではない。」
「ええ⁉」

殺し屋の少女は、腹を決めて剣を抜くタツミの肩を足場にして乗り越え後ろで逃げるアリアたちに迫る。
「……クソッ、こっちへ来た‼」
「標的……葬る‼」
護衛は焦りながら機関銃の銃口を殺し屋の少女に向けて発砲する、しかし狙いを付けて撃っている訳ではもない射撃だ、偶に掠る事はあっても動きを止める事は出来ず銃弾を摺り抜けて護衛の胴から上を斬りとばす。
「ヒィッ！」
「葬る。」
「待ちやがれ‼」
その光景を目撃したアリアは恐怖のあまり地面にへたり込んでしまった、そこを狙い暗殺者の少女が冷たい視線で捉えるが、間一髪でタツミが助けに入る。
「お前は標的ではない……斬る必要はない。」
「でもこの娘は斬るつもりなんだろ⁉」
暗殺者の少女は淡々とした口調で標的であるアリアから離れるように促す、だがタツミも引く訳にはいかずアリアを背に庇い向かい合う。
「うん。」

「うん!!?」
暗殺者と言うには間の向けた返答が返ってくる、タツミは対峙している相手の素直な返答にツッコんだ。
「邪魔すると斬るが?」
「だからって逃げられるか!!」
暗殺者の少女は再三の警告をしてきたが、もはやタツミも意地になりアリアの傍を離れない。
「そうか……では葬る。」
警告しても無駄だと悟った少女は、静かな殺意の籠った目でタツミを捉えた。

レオーネと呼ばれた女性と仮面の男は、探し人の居る倉庫へ向かっていた。
お互いに言葉は交わさない沈黙だけが二人の間に流れていた、もっと言えばレオーネの方は居た堪れなさそうにしていたが。
「!·アカメの奴めずらしいな、まだしとめてなかったのか……ってアレ?」
「!……タツミ、何故ここに?」
そして、目的が見えてくると普段と違い標的を仕留めきれてない仲間の姿を発見して、相対している相手を見ると二人とも見知った様な反応を見せた。

「……アチャー……どこまでついてないんだ弟くん。」
「？レオーネ、何故タツミが弟だと知っている？」
「え⁉そっそれは……。」
レオーネがタツミの間の悪さ思わず悲観的な言葉を呟くと、仮面の男がレオーネの言葉の意図に疑問を持ち詰め寄った。
無意識でついて出たセリフを聞き取られ、返答に窮している時もタツミ達の間には緊迫した空気が流れていた。
『少なくとも……今の俺に勝てる相手じゃない……。』
相手の少女の力量が自分より遥かに上であることは、直接対峙しているからこそ理解できてしまう。
『けど……そんなこと気にしてられない‼なにより、女の子一人救えない奴が村を救う事はおろか兄貴の仇を討つことなんて出来る訳ない‼』
格上の相手であっても逃げられない状況で追い詰められたが故の覚悟が、剣を握る手と体に力を籠めさせ静かな睨み合いが終わりを告げた。
体を矢のように前へ飛び出させ接触、刃と刃がぶつかり合い甲高い金属音と火花散る鍔迫り合い、刃を下げ下段より切り込んだタツミの回し切りはアカメと呼ばれた少女に跳ばれて躱され、その勢いのまま腕に鋭い蹴りを入れられタツミは体勢を崩した。

「ヤベッ！」
瞬間持っていた剣を手から離してしまう、隙は一瞬だったが相手は腕の立つ殺し屋、タツミの懐に刀を突き入れた。
「カハッ……。」
「タツミ!!」
「……。」
致命傷とも言える一撃を受けその場に倒れ伏せたタツミに、アカメは無言で刀を突き付ける。
「……ク。」
暫く無言を貫いていた死んだ筈のタツミから、声が漏れると徐に立ち上がる。
「油断して近づいても来ねぇのかよ。」
余程強く突かれたのだろうか、足元はおぼつかずに僅かに震えている。
「手応えが人体ではなかった。」
「へへっ、村の連中が守ってくれたのさ。」
油断なく刀を向けるアカメの言葉を聞いて、タツミは懐から壊れた御神体を取り出した。
「ふーん。」

『アカメの刀と相対してまだ生きてるなんて、弟くんやるなあ。』
「ふぅ……。」
　二人の一連の攻防を見守っていたレオーネはタツミのしぶとさ感心し、仮面の男は安堵の息をはいた。
「葬る。」
「わっちょっと待って‼」
　問答の時間は終わったとでも言うのかアカメは構え直して駆けだした、立ち上げれたとはいえまだ万全とは言えないタツミは慌てた。
「お前等、金目的てかなんかだろ！この子は見逃してやれよ！」
　戦ってダメだったので、今度は情に訴えかけようして早口で説得しようとした。
「戦場でもないのに、罪もない女の子を殺す気か‼」
『ダメだ……コイツ全く話を聞いれねぇ‼』
　だがアカメは足を止めず一直線にタツミたちに切迫してくる。
「待った。」
「止まれアカメ。」
「！」
　これまでかと固く目を閉じ身構えると、誰かがアカメを止めに入った声が聞こえた。

「何をする……来ていたのかイッセイ?」
「イッセイ⁉」
仮面の男に視線を向けたアカメは傍目では判り難いが驚いていた、そして兄の名を聞いたタツミも仮面の男を見る。
「まだ時間はあるだろ?この少年には借りがあるんだ、返してやろうと思ってな。」
「アンタは俺に忠告してくれた!」
アカメを諌めたもう一人が仮面の男に意識を向けているタツミに視線を送る、帝都で見ず知らずのタツミに声を掛け親切に忠告までしてくれた女性とレオーネは細部は違っても大体のシルエットは同じだった。
「ヤッホー弟くん!君〜ここに居るって事は、お姉さんの忠告無視したな〜⁉」
「あ!やっそれは……。」
せっかくの親切を無碍にされ少しばかり腹を立てるレオーネに、取り繕う事も出来ずにたじろぐ。
「全く……あぁ、待ってよ副長!」
「……話が長い。」
タツミの困惑した表情に呆れていたら、そんな事は脇に置いて倉庫へ向かうイッセイの後を慌てて追う。

「でもさぁ～、副長も会うの久々なんでしょ弟くん？」
「積もる話なら後ですする、今は二人の方を優先する。」
　イッセイに追いつきつ隣を歩きながら話題を振るが、当のイッセイは取り合う事は無く歩幅は変えなかった。
「あ、兄貴？兄貴なのか⁉兄貴なんだよな⁉やっぱり生きてて……！」
　そんな素っ気ない対応を見せ続けるイッセイも、タツミの呼び掛けには足を止め仮面を外して向き直した。
「……何故来たタツミ？」
「ちょっ副長⁉」
　再会した弟に向けるには刺々しい言葉と態度だった、そんなイッセイの発言に驚いて慌てるレオーネ。
「っ！なんだよ……それ！」
「仕送りは続けていた、お前は故郷でも暮らしていけたはずだ。」
　生きていた兄から出た言葉に言葉を失うタツミに、イッセイは拒絶してようなセリフを吐く。
「っっっっ！言わせておけばなんだよ！ずっと音信不通で！帝都に来たら死んでる⁉それで仇を聞いても教えてもらえず……それで……それで生きてたら生きてたで

殺し屋集団(ナイトレイド)の副長⁉何やってんだよ兄貴‼」

流石に我慢の限界だった、堪忍袋の緒が切れ溢れ出した兄への不満を感情に任せてぶちまける。

「頭に血が昇りやすいのは相変わらずか、そんな事だから死にかけるんだ。」

「なんだと！」

激高するタツミを前にしてもイッセイは態度を崩さず、思ったことそのままの事を言うものだからタツミもけんか腰で突っかかる。

「落ち着け弟くん！副長も！」

「……。」

「……。」

このままでは埒が明かないと視線の間に入ったレオーネ、それで一旦は静かになったがお互い無言のにらみ合いが始まった。

「ハァ、やれやれ……その倉庫に用事があったんじゃないの副長。」

「……そうだったな、愚弟に気を取られて忘れるところだった。」

ほっとけばいつまでも睨み合ってそうな二人に、このままじゃ不味いと思ったレオーネ即座に話題を変えた。

レオーネの話で再び倉庫に意識を戻したイッセイは、そちらに向けて歩き出す。

「愚弟⁉」
「ハイハイ落ち着いて弟くん。」
　まだ怒りが収まらないタツミはイッセイの発言に噛みつこうとして、すかさずレオーネに宥められる。
「さっき、なんの罪もない女の子を殺すのかって言ってたよね？」
「えっ？あっ！うん……。」
「本当に、そう思う？」
　とっさの事とはいえ自分が言った言葉だ、何より自分が見てきた限りでアリアの家族は良心を持った善人だった。
「何だよ？何かおかしいのか？」
「可笑しくはないけど……私の忠告、人を簡単に信用しない事って覚えてる？」

　まるでそれが間違った認識であると言われているようで、タツミは不貞腐れたような顔でレオーネを睨む。
　幼子の様に素直に不満を露にするタツミに、思わず苦笑いを浮かべまるで出会った時に別れ際で言ったセリフを覚えているか聞いてきた。
「？勿論だろ。」

覚えてるも何も昨日言われた忠告だし、それを無視したから今の現状がある、不思議に思いながら覚えていると頷いた。
「そっか、じゃあさ……今から見る光景を見ても罪が無いなんて思えるかな?」
「はぁ?……! 何だよ……これ……!」
そう言うとレオーネはイッセイの元に視線やった、それに続いたタツミは眼前の光景を信じられずに硬直した。
「目を逸らさずよく見ろ、これが帝都の闇だ。」
倉庫の扉を開けたイッセイが後ろを見ずに語り掛けてくるが、タツミは視線を逸らすことも答えを返すことも出来ずに静止している。
「地方から来た身元不明の者たちを甘い言葉で誘いこみ、己の趣味である拷問にかけて死ぬまで弄ぶ、それがこの家の人間の本性だ……。」
倉庫の中の壮絶で悲惨な光景は純粋な少年には衝撃が強すぎた、至る所に苦しみながら息絶えたであろう人の亡骸が放置されここで行われた所業の凄惨は伺える、まだ生きている者も居るのか檻の中からは低い呻き声が漏れ出していた。
「ここに居たんだな……済まないサヨ、出迎えが遅れた。」
「……サヨ?」
そして無残にも吊るされ体の各所が欠損した遺体の中に、散り散りに分かれ行方の分

からない仲間のとよく似た容姿の少女を発見した。
「おいサヨ……サヨ……！」
　何故この中にサヨが居るのか訳も分からずタツミは掠れるような声で呼び掛ける、しかしその声に反応してくる素振りをサヨは見せなかった。
「知り合いの子で合ってたんだな……可哀想に……。」
　イッセイの探し人タツミの仲間であったサヨの死を悼む二人の背を見ながら、レオーネは静かに無残な姿になり晒される少女の遺体を見つめた。
「おっと、逃げようってのは虫が良すぎるぜ嬢ちゃん。」
　そんな状況の最中、アリアは自分に意識が向いてないのを好機と見たのか、足音を忍ばせて逃げ出そうとしていたがレオーネに襟首を掴まれ失敗した。
「この家の人間がやったのか。」
「そうだ、護衛達も黙っていたので同罪だ。」
　タツミは静かに佇んでいたが不意にそう聞いていた、その質問に肯定する答えが返される。
「う……ウソよ！私はこんな場所があるなんて知らなかったわ、タツミは助けた私とコイツ等とどっちを信じるのよ‼？」
　必死に無実を訴えるアリア、最後には泣き落としの様な事までしているのだから見苦

しい。

「イ…ッ…セ…さん…タ…ツ…ミ…イッセイさんそれにタツミだろオレだ……。」

アリアの命乞いの戯言が響く中、弱弱しい声で自信を呼ぶ声がタツミとイッセイの耳に届いた。

「い……イエヤス‼?」

「お前も一緒かイエヤス……よく堪えた。」

もう一人の仲間イエヤスが檻の中から手を伸ばしこちらを見ている、その体には病魔に侵されているような斑点が浮かび上がっていた。

「俺とサヨはその女に声をかけられて……メシを食ったら意識が遠くなって気がついたらここにいたんだ。」

如何にか自由になろうと藻掻くアリアを指さし、ここ居た経緯を語るその目は強い恨みが込められていた。

「そ……その女が……サヨをいじめ殺しやがった……‼‼」

苦しそうな声音で確信を語る表情は般若の様に怒りがあふれ、今日まで壮絶な体験を物語っている。

「う…ううっ……。」

その時の光景を思い出したのか、悔しさの混じった嗚咽が静まり返った場に悲しく響

く。

「何が悪いって言うのよ！」

　その声を遮るように豹変したアリアが逆上し声を荒げる。

「お前達は何の役にも立てない地方の田舎者でしょ⁉家畜と同じ‼それをどう扱おうがアタシの勝手じゃない‼」

　事実を知られ開き直ったアリアは身勝手すぎる理屈を説きだした、その表情は悪鬼にも似た醜悪さがある。

「だいたいその女、家畜のクセに髪がサラサラで生意気すぎ‼私がこんなにクセっ毛で悩んでいるのに‼だかこそ念入りに責めてあげたのよ‼むしろこんなに目をかけて貰って感謝すべきだわ‼」

　ここまでくれば誰がどう見ても、素のアリアが非人道的で傲慢な人の姿をした悪魔であると理解できる。

「前任の皮を被ったサド家族か……ジャマして悪かったアカメ……。」

「葬る……。」

「待て。」

　傍若無人な言動を繰り返すアリアに、レオーネは下衆を見る目で睨みアカメは今度こそ仕留めると刀を握る、だがまたもタツミが待ったをかける。

「まさか……またかばう気か？」
「レオーネ、アカメ手を出すな……アイツを殺めるべき俺達じゃない。」
ここまで聞いてもタツミはまだアリアを守ろうとしているのかと詰め寄ろうとすると、タツミを見ていたイッセイがそれ止めた。
「副長？」
「イッセイ……？」
イッセイの命令に戸惑いを見せるレオーネとアカメを余所に、イッセイは無言でタツミを見ていた。
「タツミ、やれるな……。」
「あぁ……俺が斬る。」
不意にイッセイがそう問いかけると、タツミはそれ応えるようにアリアの胴から上下真っ二つに断ち切った。
「あ……。」
一瞬の事で遅れて自分が斬られた事を認識したアリアは、短い言葉を最後に地面に転がった。
「ふぅん……。」
『憎い相手とはいえためらわず切り殺したか……。』

レオーネは感心した、如何にその人物が憎かろうと人を殺めるのは誰しも一度は躊躇う、だがタツミはアリアが仲間の仇と知ると迷わず切り殺した、無慈悲に無機質にただの一時の逡巡もなく。

「へへ……さすがはタツミ……スカッとしたぜ……!ゴフッ……。」

そして一部始終を見ていたイエヤスは、憑き物が落ちたような晴れやかな表情をして笑っていたが突然血を吐き出した。

「イエヤス⁉」

「!どうしたイエヤス!」

イエヤスの吐血に焦り傍に駆け寄るイッセイとタツミ、檻を壊し中からイエヤスを助け出すとタツミは腕の中に抱えた。

「ルボラ病の末期だ……ここの夫人は人間を薬漬けにしその様子を日記に書いて楽しむ趣向があった……ソイツはもう助からない。」

娘が鬼畜なら母は外道、鬼の子は鬼である……、悪趣味を通り越して悪行とも言える所業、その被害者は決まって弱い立場の人間でありイエヤスもアリア一家の餌食になっていた。

「……イッセイさん、タツミ。」

苦しそうな息遣いで二人に呼び掛けるイエヤス、その表情には僅かな陰りも見えな

い。

「サヨはさあ……あのクソ女に最後まで屈しなかった……カッコ良かったぜ……。」

この場所で帝都に来たことを悔やみ続けた筈である、しかしそれでもサヨは最後まで抗い通し彼はそれを誇る様に話す。

「だからこのイエヤス様も最後は……カッコよく……。」

「もう気力だけでもってる状態だったな……。」

そう言い終わるとイエヤスは息を引き取った、その最期を看取ったアカメはイエヤスの胆力を称賛した。

「……どうなってんだよ帝都は……。」

「それを知りたいなら、俺と来い……。」

腕の中で永遠の眠りについたイエヤスの顔を見ていたタツミは憤りを隠せずに溢す、誰に投げた訳でもない言葉をイッセイが拾ってくれる。

「兄貴……。」

「俺が、今の帝都……しいては帝国の現状をすべて教えてやる。」

兄の顔を見上げたタツミに、しっかりと視線を合わせて説得する。

「でも……二人の墓は？」

「遺体なら後でお姉さんが運んでおくから、今は一緒に行こ……。」

サヨとイエヤスの遺体を視線を向ける、手遅れになってしまったから責めて自分の手で弔いたい、だがここに残るのは状況的に拙い、だからとレオーネに諭される。
「……分かったよ。」
タツミも状況は理解しているため、一旦イッセイ達の後に続いた。
「やっと戻ってきたか……イッセイ何でいるんだ?」
集合場所には既に他の殺し屋も集まっていた、その中の一人で鎧姿の大男が待ちかねた様子で出迎えるとその中にイッセイが居る事に疑問を投げかけた。
「こいつは珍しい、副長が自ら動くなんてな。」
それに続いて細身の男が物珍しそうに、イッセイを見て呟いた。
「気にするな、俺の用がある人間と今回の標的が同じだっただけだ。」
「はぁ……あの、後ろに居るのは?」
イッセイは気にした様子も見せずに仮面を被り直しフードに手を掛ける、ピンクの髪とネコ目が特徴的な小柄な少女がイッセイの背後に居たタツミに視線を向ける。
「イッセイの弟だそうだ。」
「へぇ……えぇぇぇ!おとっ弟!?」
その質問には何故かアカメが答える、最初こそ聞き流していたが意味が理解できてくると大仰に驚いた。

「……何だよ？」

周りに居た殺し屋の仲間たちもタツミを観察し始める、その視線に僅かにビビりながらも睨み返していた。

「ほぉ、こいつが。」

「確かに似てるな、顔の感じとか。」

何となく納得したのは周囲の反応を見ればわかる。

「取り敢えずは新入りとして俺の傍に置くことにした、皆もそのように頼む。」

「はぁ！何でそうなんだよ俺は⁉」

一応の理解がされたのを確認してイッセイは仲間たちに自分の判断を伝えた、それ聞いたタツミはまたも噛み付く。

「まぁまぁ、副長はそっちの方が安心できるんでしょ？」

最早なれたのだろう、レオーネがタツミを諌めるとイッセイの真意を教えた。

「あぁ、その通りだ……。」

「そう言う事で折れてあげなよ弟くん。」

レオーネの憶測が合っているとイッセイは認めた、それを聞くとタツミに向き合い諭す。

「……分かった、どのみち着いていくつもりだったしな。」

ここまでレオーネには素直に従って来たからか、まだ不服なようではあったが従ってくれた。

「作戦終了帰還する!!」

話し合いが終わったの見計らってアカメが号令を出すと、全員がその場を発った。

嘗て戦場を駆けた龍鬼は、今は影を駆ける……国が腐り傾く時代、悪を喰らうは怒れる龍か地獄の鬼か……それは、誰にも分らぬ事。

影差す国の闇を知る

タツミは思い出していた……まだ、帝都の来る前の時の事を貧しくとも人が人であれた日々の事を、生きて会う事の出来なかった二人の墓の前で……。

【私達三人死ぬ時は同じと誓わん！】

【おう！帝都で出世して金稼ぎだ！】

【俺達でこの貧乏故郷を救うんだ‼】

「……とか言ってたのによ、俺……一人になっちまったじゃねぇか……。」

希望に湧き恐れすら知らなかった時の楽天的過ぎた自分が、今は忌々しく思える程タツミの心に影を落としていた。

「何を世迷言を言っている、まだ俺が居るだろ……。」

暗く陰鬱な表情のタツミの横にイッセイが傍に立つ、その手には花束が四つ持っていた。

「あれからもう三日だ、いい加減意識を切り替えろ。」

手に持つ花を二人の墓と一緒にある二つ並んだ誰かの墓の前の置くと、タツミの方は見ずにそう諭す。

「そんなに簡単に出来るかよ……ずっと一緒だったんだ。」
　イッセイの言葉にタツミは晴れない表情を浮かべたまま反論した、兄と離れていた年月を共に過ごした二人の喪失は思ったよりも応えている。
「いつまでウジウジと……サヨとイエヤスが今のお前を見たら落胆するだろうな。」
「何だと！」
　これまでの経緯を知っていれば凡そ出てこないであろうセリフをイッセイは躊躇する事無く吐いた、そして単純で直情的な性格をしているタツミは弾かれたようにイッセイに反目する。
「なんだ？本当の事だろ、サヨもイエヤスもお前に後を託して逝った、そのお前がここで塞ぎ込んでいるんだ落胆だってしたくなる。」
「んぐぅ……だったら！如何すれいいんだよこれから⁉軍には入れず、死んだと思った兄貴は殺し屋になてって……俺は……俺は、如何したらいいんだよ……。」
　イッセイの無神経ともいえる言い分に反論するが、怒りで荒げていた声も次第に小さくなり最後の方は消え入りそうなほどか細くなる。
「自分で考えろタツミもう子供じゃないだろ。」
「うううう。」
　飽く迄厳格な姿勢を貫くイッセイの態度に、遂にタツミは感情の制御が出来なくなり

泣き始めた。
「……あぁハイハイ！もう終わり！」
二人の事を心配して近くに隠れて見ていたレオーネは、その非情としか言えないイッセイとタツミの空気に耐えられずに割って入った。
「レオーネ？見ていたのか……。」
「見ていたのか？じゃないですよ副長！傷心中の弟の追い込んでどうするんですか？激励したいならもっと言葉を選んでください！ほら大丈夫だよ弟くん、苦しいときは我慢しないで良いんだから。」
「お姐さん……。」
二人の間に入ったレオーネはイッセイを叱責すると、塞ぎ込むタツミを優しく宥める。
「ほら立って、ここに居たんじゃ気が落ち着かないでしょ？よかったらアジトの中を案内しようか？」
「……うん。」
レオーネが相手だと素直に従うタツミは、彼女に連れら断崖の下に建つ建物へと誘導されていく。
「……やれやれ、余りタツミを甘やかさないでくれよ。」

その後ろ姿を見ていたイッセイは呆れた様子で見送ると、三つの墓の前に向き直した。

「久しぶりだなサヨ、イエヤス……迎えに行けず、済まなかった。」

二人の墓で頭を下げ謝罪の言葉を掛ける、そして三つ目の墓の前で片膝をついた。

「ユウナそれにアサカ、二人の事を頼んだ……君達なら、戦意を失った弟にどう向き合ってくれたんだろうな?」

墓の主ユウナとアサカと呼ばれた人は故人である故に返答できない事は、イッセイも理解しているがそれでも聞かずにはいられなかった。

「……変な事を聞いたな、もう戻るよ……。」

束の間の沈黙の時が流れる、まるで懺悔でもしているかのように強く閉じた瞼の内に何を思うのか、窺い知るとこは出来ない。

やがて、目を開けたイッセイ穏やかな表情でユウナの墓を見つめて立ち上がり体をアジトへ向けた、その目は強い覚悟が宿り静かな執念の火が揺らめてい見えた。

「……え?まだ仲間になる決心ついてなかったんですか?」

アジトの中の会議室で一人で本を読んでいた眼鏡の女性が、レオーネに連れられたタツミを不思議そうに見つめながら話してくる。

「そうなんだよシェーレ、弟くんも頑固でね……何か暖かい言葉を掛けてあげてくれない？」

レオーネはタツミの頭に手を乗せて、シェーレと呼んだ女性にも彼の説得の協力を仰ぐ。

「ん～そもそもアジトの位置を知った以上、仲間にならないなら殺されちゃいますよ？」

「暖かすぎて涙が出るぜ……。」

シェーレは天然なのか確信犯なのか、傷心中の身の上のタツミに身も蓋もない事を告げてくれる。

シェーレの余りにドライな対応に一周回って、感傷に沈んでいた気持ちも持ち直したようではあるが。

「よく考えた方がいいですよ。」

そう言って会話を切り上げるとまた読書に戻る、余りに熱心に読んでいるものだからタツミは読んでいる本の表紙を覗き見た。

『……やっぱり変人の集まりなのか？』

［天然ボケを直す１００の方法］とか書かれた表紙を見たタツミは、一瞬ここが本当に殺し屋たちのあじとなのかとうたがってしまう。

「あーっ!!」

会議室での何とも言えない一幕の余韻を切り裂く元気のいい甲高い声が響いたので、そちらに視線を送るとそこにはアリアの邸宅での襲撃の時にも居たピンクの髪の利発そうな少女が目を吊り上げこちらを指差し。
「ちょっとレオーネ！なんでソイツ、アジトに入れてんの⁉」
自棄に当たりきつい気がするのは気のせいでは無いだろう、まるで縄張り入った余所者を威嚇する猫である。
「だって副長が手元に置くって言ってたし、もう仲間みたいなものでしょ？」
「イッセイさんが勝手に言ってるだけでしょ⁉まだ仲間じゃないわよ！それにボスの許可も下りてないんだから！」
そんな少女の反応などどこ吹く風とレオーネはさも当然の様にタツミを受け入れいる、その状況が面白くないのか全身の毛を逆立てるが如く怒り焚ける。
『？』
その様子を見ていたタツミは急に此方の方を向き、穴が開くほど凝視する少女の顔を不思議そうに見つめ返した。
「不合格ね、とてもプロフェッショナルなわたし達と仕事出来る雰囲気じゃないわ……顔立ちは置いといて！」
「なっ‼？」

凝視するだけしての不躾な物言いに、思わず絶句したタツミ。
「なんだと手前ぇ！」
「はいはい気にしない、マインは誰にでもこうなんだよ。」
兄の時とは違い同じ年の頃の人間と接するような幼い怒り方をするタツミを、今日何度目か分からないレオーネが宥める。
「フン！」
そしてマインと呼ばれた少女は、癇癪を起こしてるタツミに反目するように不機嫌そうに顔をそらした。
「どぉぉぉりゃあああああ！」
次に連れてこられたの訓練場だった、そこではリーゼントヘアーの大男が上半身を裸のまま槍の鍛錬に勤しんでいた。
「でやでやでやでやっ！」
「ここは訓練という名のストレス発散所だよ。」
大声で訓練を続ける大男を脇に置いて、レオーネが訓練場をについて説明してくる、傍から見てもカオスな状況なのにタツミは気にした様子がない。
「んで……あそこにいる、見るからに汗臭そうなのがブラート。」
「ぬおおおおおお！」

漸く大男ブラートに触れたレオーネの示された指の先では、ブラートが咽かえるほど暑苦しい闘気を滾らせ槍を奔らせていた。
『……凄ぇ！なんて槍さばきだ！』
ある程度は実力があるタツミでも圧倒される槍捌き、それは記憶に有る兄イッセイと並ぶとも劣らぬ見事な動きだった。
「ふぅーっ」
やがて鍛錬が一段落したのか、ブラートは柄を端を地に落とし大きく息を吐いた。
「おっ、レオーネじゃん！とそこの少年は……この間のイッセイの弟か！」
レオーネたちに気が付いたブラートは、訓練で火照って汗を掻きそれが日に当たってキラキラと反射する体をこちらに向けた。
「なんで俺のことを？」
「ん？この姿は初めてだっけ？初対面の時に鎧に包まれてた奴だよ。」
初対面の筈なのになぜか自分を知っていたブラートに不思議そうにしていると、ブラートは初対面の時の自分の立ち姿を教えた。
「あ、ああ！」
そう言われると直ぐに該当の人物が、目の前のブラートであると理解できた。
「ブラートだ、ヨロシクな！」

「ド……ドモ。」

快活な熱血漢と言った印象を受けるブラートに握手を求められ、遠慮がちに応じるタツミの手を強く握り返した。

「気をつけてね、ブラートは男色の気があるから。」

その横で悪戯っ子の顔をしたレオーネがとんでもないことを耳打ちしてきた、最初は驚いたが質の悪い冗談だと思いブラートを方を見た。

「オイオイ、誤解されちゃうだろ？なぁ。」

『否定してくれよ!!』

何故だか頬を染めいい笑顔でこちらに熱視線を送るブラートに、我が身の貞操の危機を感じ取ったタツミだった。

その後、何故かアジトを離れ草むらを分け入った先で緑の髪とゴーグルが印象的な若い男が、泉が良く見える見晴らしのいい場所に陣取っていた、その男は呼吸が荒く凄く興奮しているようだった。

「そろそろレオーネ姐さんも水浴びの時間だ、俺はあの胸を見る為なら危険を省みない！」

その性格は相当な好色家のようでここに居たのも、レオーネの水浴びを覗くことが目的だったようだ。

「じゃあ指二本貰うね。」
「ばぁあああああ‼」
　しかも本人は本気で命懸けらしく天晴なスケベ根性である、最もその目的の人物が自分の背後に居るとは考えつかなかったようだが。
「懲りないな～ラバは。」
「クソッ、まだいける！」
　指を折られ相当な激痛に感じてる筈だが、まだ余裕があるようで抵抗して見せるのは殺し屋故の我慢強さから来るものだろうか。
「じゃあ次は腕一本ね……と言う訳で、このバカはラバックね！」
　制裁が足りなかったと思ったのか今度は腰を踏みつけ腕を捻じる、それでもラバックと呼ばれた男は音を上げないのだから大したスケベ男だ。
　ラバックを締め上げながら紹介を続けるレオーネに、タツミはこれまで抱いていたイメージが崩れる音が聞こえて気がした。
「次は……河原かな？」
　次なる人物が居ると思われる場所へ向かう為、川辺を歩くタツミはここまで個性的過ぎる人物達の圧倒されくたびれてしまっていた。
「なんかもう、お腹いっぱいなんだが……。」

「アハハ……次は美少女だし、あたし達の中では真面な方だから安心して。」
げんなりしてるタツミを気遣いながら、レオーネは目的の人物の元へ案内していた。
「ホラ、あそこにいるのがアカメだよ、可愛いでしょ？」
目的の人物を見つけタツミに指で指示した、そこには件のアカメもいたが火で炙られた絶賛食われて最中の危険種の方が目を引いた。
『どこがー!!!』
その危険種を前にして黙々と貪り食う見覚えのある黒髪、アリアの屋敷でタツミと対峙した相手である少女だった。
「！アイツが食ってんのエビルバード⁉一人で殺ったのか⁉」
それよりもアカメが食べていた危険種に目が行くタツミ、その危険種は一体で村を食い滅ぼすとも言われる大食いで故郷に居た頃、タツミはサヨとイエヤスの三人で漸く討伐できた程危険な相手だった、最もイッセイは一人で複数匹を狩って準備運動位だったらしいのだが……。
「アカメはねぇ、アレで野生児だからね。」
見た目に似合わない逞しさを見せつけるアカメを、朗らかな視線で見つめしみじみと語るレオーネ。
「レオーネも喰え。」

「あっ！ありがと。」
　黙々と獲物を食べていたアカメがレオーネにも投げ渡してくれる、もう一つ焼かれたばかりの湯気が上る肉を手にしジッとタツミを見つめる。
「お前……仲間になったのか？」
「いや……。」
　終始無言だったアカメが漸く発した質問に、タツミは否定の意を返す。
「じゃあまだ、この肉をやる訳にはいかない。」
『いらねぇ!!』
　如何やら仲間になっていたら分けて貰えたらしい、だがタツミの方もそれを欲してないようだ。
「ハハハ……残念だったね弟くん。」
　レオーネは苦笑いを浮かべながら、受け取った肉を咀嚼し始める。
『コイツ……俺を二度も殺そうとした……苦手だぜ……。』
　口数も少なく表情の変化も僅かで感情が見えないアカメは、直情的で単純な性格のタツミには理解しがたい人種の人間だった。
「それにしても、今日は奮発したね？」
「ボスが帰ってきてる。」

「よっ。」

レオーネはいつもより獲物が豪華である事に疑問を感じアカメに理由を聞いてみると、彼女たちのボスが帰還していると答える、それに片腕が義手の女性が手を挙げて応えた。

「ボス!!」

その女性を視認したレオーネの反応を見ると、如何やらこの人物がナイトレイドのボスで間違いないらしい。

「お帰りなさいボス、何かお土産あります?」

「それよりレオーネ、お前三日前の仕事で……作戦時間オーバーしたそうだな?」

『……まず!』

上機嫌で話題を振るレオーネの表情の明るさに対して、彼女たちのボスの醸し出す雰囲気は穏やかではない事を、レオーネは敏感に察知しその場で背を向け逃げ出した。

「ひいいいいいいっ。」

だが逃げるレオーネの背に向けて射出された義手に腕を掴まれ逃走は失敗に終わる、ギリギリと伸ばしたリールを巻き戻す音が無暗に恐怖心を煽られる。

「強敵との戦いを楽しみすぎるのは良くない……そのクセをなんとか直すんだ。」

「分かりましたからそのギリギリ音を止めてください。」

「……何してるんですかナジェンダさん？」
薄い笑みを浮かべた顔で淡々と説教を静かなだけども人を恐れさせるだけの威圧感のある声で語る姿に、目の端に涙を溜めて懇願するレオーネ、その様子を此方に歩み寄りながら無言で見ていたイッセイがボスの事をナジェンダ呼び質問した。
「ん？あぁイッセイか、帰還の報告がまだだったな今戻った。」
「っ！助けて副長！」
レオーネを義手で拘束したまま此方に向かってくるイッセイの姿に帰った事を伝えるナジェンダ、そしてこの状況を何とかしてほしいレオーネは救済を求めた。
「全く…毎度になりますが、戻っているなら直ぐ此方に顔を出してくださいよ……あと、レオーネを早く解放してやってください。」
「すまんすまん……レオーネ、今言ったことを今後に活かして反省しろよ。」
「はい……副長⁉」
「……睨むな、分かっているさ。」
漸く解放されてほっと安堵の表情になるがそもそもタイムロスの原因がイッセイであると思い出したレオーネは、イッセイの顔を恨めしそうに睨む。
イッセイもレオーネの視線の意図には気付いているのか、視線をそらさずに受け止めて返した。

「ところでそこの少年は？」
　二人でだけの視線のやり取りをしていた傍で、ボスの興味はその場に居たタツミに移っていた。
「あっ、そうだボス！この子は副長の弟君なんだけど、うちで雇いましょう！」
「オイ！だから勝手に！」
「イッセイの弟？見込みはあるのか？」
「ありますよ。」
　話題が切り替わったのを感じたレオーネはここぞとばかりにタツミを売り込む、しかし当の本人であるタツミは自分を置いて話が進むことに反抗しているが、そんなタツミの抵抗も虚しく話はどんどん先へ先へと進んでいく。
「まぁ、物は試しにやってみなよ。」
「バイトかよ！」
「時給も高い。」
「バイトかよっ！」
「仕事以外は自由にできる時間も多いぞ。」
「だからバイトかよぉぉぉ！」
　状況的にほぼ強制で仲間に加えられそうな空気になってきた事で、頭がこんがらがっ

ているのか突っ込みの切れもいい。
「……アカメ……会議室に皆を集めろ、この少年いやイッセイの弟の件も含め前作戦の結果を詳しく聞きたい。」
荒ぶるタツミの姿をじっと観察していたナジェンダが、椅子の背もたれに架けていた上着を肩に着てアジトの方向へ進みだした。
アジトの会議室の中では召集されたナイトレイドの面々とタツミが先程までナジェンダに、三日前の作戦のあらましと細かい状況の説明をしていた。
「成る程、事情はすべて理解した。」
全ての報告を聞き終えて理解したナジェンダは一旦話を区切ると、部屋の中心に立つタツミに視線を向ける。
「タツミ……ナイトレイドに加わる気はないか?」
内情を知ったうえでナジェンダからも勧誘されたタツミ、だがタツミの表情は硬く困惑しているように見える。
「断ったらあの世行きだって言われたんだけど?」
「いやそれはない……だが返す訳にもいかないからな、我々の工房で作業員として働いてもらう事になる。」
少し前にシェーレの言われたセリフを思い出しながらここで断った時の生き残れる

可能性を探るタツミ、しかしその心配はなく軟禁状態になるとはいえ延命はさせて貰えるらしくひとまず安堵の意気を漏らす。
「とにかく断っても死にはせん、それを踏まえた上で……どうだ?」
命の心配がなくなり幾分か警戒が解かれたと察しもう一度加入を勧める。
暫く無言で俯いていたタツミは顔をイッセイに向けると、ゆっくりとだが決意を示すような声音で語りだした。
「……俺は……帝都に出て兄貴の下で出世して、貧困に苦しむ村を俺も一緒に救うつもりだったんだ……。」
兄が帝都で軍人として活躍していると信じていた、確か便りはよこされなかったが仕送りは上がる事もなかった下がる事もなく毎月決まった額が送られてた、だから便りが無いのは書く暇もないほど忙しいのだと思っていた。
「ところが帝都は腐りきっていて、兄貴は殺し屋になってるじゃねぇか!」
世も可笑しいがそれ以上に兄も変わっていた、今まで村の中で鍛錬と狩りをして貧しくも穏やかな生活を送っていたタツミには到底予測など付かない事態である。
「中央が腐ってるから地方が貧乏で辛いんだよ、その腐ってる根源をとっぱらいたくんねえか?男として!それに、イッセイには帝国を裏切った理由が……。」
「ブラート……!」

柱に背を預けて立つブラートがタツミに語る彼の言い分も最もだった、そしてイッセイが軍を離れここに居る訳を話そうとするが途中でイッセイ本人に遮られる。
「……。」
「……へいへい、それ以上は語るなだろ。」
イッセイが目を細めてブラートを睨むと、ブラートは両手を上げてそれ以上は語ろうとしなかった、親しい間柄のようでタツミが知らない過去のイッセイを知っているらしい。
「……イッセイはすでに知っていると思うがブラートも元は有能な軍人でイッセイとは同期だった、だが帝都の腐敗を知り我々の仲間になったんだ。」
タツミに詮索させないために話題を切り替えるナジェンダ、同じ戦場を駆けた同志だからこそある程度の事は把握していると言っているらしい。
「俺達の仕事は帝都の悪人を始末することだからな、腐った連中の元で働くよりずっといい。」
「……俺は、違う目的もあるがかつて犯した過ちを濯ぐ為にも参加してる。」
二人もこれ以上詳しくは語りたくはないらしく、ナジェンダの話を継ぎ足して有耶無耶にする。
「……でも、悪い奴らボチボチ殺していったところで、世の中大きく変わらないだろ？そ

れじゃあ辺境にある俺達の村みたいな所は、結局救われねぇよ。」
流石に続きを聞ける雰囲気でもないと感じ取ったタツミは、イッセイ達の過去を気しつつ話の内容を合わせる事にした。
「成る程、ならば余計にナイトレイドにピッタリだ。」
「なんでそうなるんだ?」
タツミの抱いた懸念は誰しもが当然思い至る事だと思っていた、だからこそナイトレイドと云う組織には向いていると断言したナジェンダに疑問を感じその訳を問う。
「帝都のはるか南に反帝国勢力である革命軍のアジトがある。」
「……革命軍?」
聞き慣れぬその言葉に思わず範唱するタツミ、彼が故郷にいる間は声も形もその噂すら流れてはこなかったその革命軍とは如何なる存在なのかそしてナイトレイドとの関係性はなのか興味が湧いてくる。
「初めは小さかった革命軍も今は大規模な組織に成長してきた、すると必然的に情報の収集や暗殺など日の当たらない仕事をこなす部隊が作られた……それが我々ナイトレイドだ。」
ナジェンダの話を要約すると革命軍とはこの国を現状を憂いた有志達が集い決起したレジスタンスであると言う事であり、ナイトレイドはその革命軍の隠密活動を専門と

しているチームであるらしい。
「今は帝都のダニを退治しているが、軍が決起した際の混乱に乗じて不敗の根源である大臣を……この手で討つ！」
「……大臣を打つ……⁉」
　タツミは目の前に広がる景色が開けて明瞭になっていく感覚を覚えていた、彼にとっての世間は精々故郷の村とその周囲の過酷な自然だけだった、だが目の前で聞いていた話はそれより広く大きいスケールだったからだ。
「それが我々の目的だ他にも個々で其々に目的もあるが今は置いておく、決起の時期については詳しい事は言えんが……勝つための作は用意してある、その時が来れば確実にこの国は変わる。」
　ボスは勝機を確信している自身に満ち溢れた声と目力でタツミを見据えた。
「……その新しい国は……ちゃんと民にも優しいだろうな？」
　話を聞き終えてから暫く沈黙を続けたタツミは、躊躇いながら短い質問をする。
「無論だ。」
　その為の革命軍であると言いうが如く、タツミの質問にハッキリと肯定した。
「成る程、スゲェ……じゃあ今の殺しも悪い奴らを狙ってゴミ掃除してるだけで……いわゆる正義の殺し屋ってヤツじゃねぇか！」

タツミは興奮していた何故なら、聞いていたそれは正に空想の物語の中に登場するダークヒーローのそれを連想させたからである。

「……プッ」

「「あはははは!」」

一人暑苦しいほどの情熱に燃えるタツミに周りに居たメンバーは沈黙していた、だが不意に誰かが噴き出すと堪えが効かずに笑い出した、イッセイを除いて。

「ふぅ……よく聞けタツミ、理由がどうあれ人殺しは罪だ……例え今の時代が搾取と困窮が当たり前で虐殺と略奪そして非道な行いが皇帝の錦の旗のもとに堂々と執り行わていても、人の命を奪う事はどんな立場にあっても許されない罪なんだ、人を殺める事を大義の為と是とするならば……あの屋敷でサヨとイエヤスを殺したあの一家と同じだ。」

「「っ!」」

「……え?」

笑いもせず苦々しい険しい表情で佇むイッセイは、重苦しい程の気配を発して周囲を黙らせ静かにタツミに語り掛けた。

さっきまでとは違う部屋の空気に戸惑いながら、自分を真っ直ぐ見つめて視線を動かさないイッセイの顔には深い影が差していた。

「……戦う理由は人それぞれだが皆覚悟はできてる……それでも意見は変わらないか？」

イッセイに続きナジェンダもシリアスな表情で確認してくる、二人の雰囲気からここに居るメンバーがどれほどの覚悟の上でナイトレイドに身を寄せているか肌で感じたタツミ。

「……報酬は貰えるんだろうな？」

「あぁ、しっかり働けば故郷の一つは救えるだろう。」

僅かな間、思案を巡らせていたが意を決した様子で最期の確認の為なのか念押ししして聞くと、ナジェンダは先程と変わらず断言した。

「だったらやる！俺をナイトレイドに入れてくれ‼そういう大きな目的の為ならサヨもイエヤスもきっとそうしてる！」

「村には大手をふって帰れなくなるかもよ？」

微塵の迷いも感じさせない表情と声でタツミは自身の決断を高らかに宣言した、そんな彼にマインはそう語りかける気遣いから来る言葉なのかそれとも半端者を受け入れたくないだけか、審議は分からないがそれでも連れを失ったタツミに多少思うところがあったのだろう。

「決まりだな……修羅の道へようこそタツミ。」

タツミがナイトレイドへの加入の意思を聞き届けたナジェンダが義手の腕をタツミに向けて歓迎の意思を見せたまさにその時、ラバックの腕に填まっているグローブから糸が巻き戻された様な音が鳴りだした。
「⁉ナジェンダさん！」
「侵入者……8人か男が7で女が1……気配を消すのが上手いようだアジト近辺まで接近されてる。」
「……。」
ラバックがその反応を見て慌てた様子でナジェンダに呼び掛けたが、それよりも早くイッセイが詳細な情報を言ってしまう、その様子を見てた他のメンバーがラバックに同情の念の籠った視線を送った。
「手強いなここを嗅ぎつけてくるとは……恐らく異民族の傭兵だろう。」
ラバックが一人役目を奪われたことに落ち込んでいるが事態は急を要する、その事を考えるよりも早く理解したメンバーの顔つきが変わった。
「仕方ない……緊急出動だ、全員生きて帰すな。」
ナジェンダの瞳から熱が消え視線を合わせただけで心臓の鼓動を止めれる程に、冷酷な表情でメンバーを見据えて指示を出した。
『雰囲気が……急に変わりやがった。』

タツミはその変貌ぶりに戦慄した、玄人の殺し屋の纏う空気を肌で感じ背に冷や汗が伝い体が強張る。
「行け！」
「え…あ……アレ？」
ナジェンダの檄が飛ぶと皆其々弾かれた様に駆け出しタツミとイッセイそしてナジェンダだけがその場に残された。
「何をボヤボヤしている。」
「いてっ！」
場の空気の変化に対応できずに置いてきぼりをくらい途方に暮れていると、ナジェンダが義手の方の腕で頭を叩かれる。
「初陣だ、始末してこい！」
怖い笑みを浮かべたナジェンダに急かされタツミは慌てて先に行ったメンバーの後を追った。
「ブラートさん！」
アジトを出てからメンバーの誰かの気配を頼りにして追いかけたタツミ、そうしてブラートの背を見つけて足を止めずに声を掛けた。

「ん？おおタツミか！一緒に行くか？」
「ハイ！」
傍まで追いついたタツミにブラートが快活な口調で同行するかを聞いてくると、彼はその問いに元気よく肯定した。
「あと俺のことは兄貴かハンサムって呼びな！」
「えぇっと……ハイ！ブラート兄！」
ブラートに呼称のリクエストをされたが正直、ハンサムは普段だと呼びにくいし兄貴ではイッセイと被るためタツミになりに考えて答えた。
「ん？……まぁ、それ良いか！」
望んだ返答ではなかったが存外悪くない回答だったのか、少し思案していた割には表情は明るい。
「よぉしっいい気分だ‼お礼にいいモノ見せてやる、ちょっと離れてな！」
「？」
タツミの事が相当気に入ったブラートは、彼に自分の取って置きを見せてやろと足を止めた。
「インクルシオォォォォ‼」
地面に手を付き気合の込められた声で何か叫ぶと、彼の背後から人の姿をした大きな

鎧が姿を見せた。
「⁉」
　現れた鎧はブラートの体を包み彼と一体となっり、あの日の屋敷でも見たあの姿へと変化していた。
「おおおおお！カッケエ！」
「だろ？コレは帝具インクルシオ。」
　その一部始終を見ていたタツミは興奮して感激していた、その様子を満足そうに眺めながら鎧について簡単な説明してくれたが……。
「てーぐ？よく分かんないけど燃えるな！」
「分ってくれるかコイツの良さ！」
　帝具を知らないタツミにはフィーリングでその秘めたる力を感じ取る、そして人間としての波長が合うのかブラートとは反りが良い。
「さて……そこでそんな君に初仕事を言い渡す！……重要だぞ？」
「お、おお！」
　鎧姿のブラートが腰に手を当てタツミを指さしながらそう告げると、気分が上がったタツミはそのテンションのまま返事を返した。
　その頃、アジト近くを流れる川の畔でアカメと三人の賊と相対していた。

「コイツがここにいるってことは、やはりアジトの近くのようだな……地道に探したかいがあったぜ。」
賊の一人が手配書にもあったアカメの姿を見ると、自身の読みが確かであったと確信してニヤリと口角を釣り上げた。
「それにしても可愛い女だな。」
別の一人がアカメの整った容姿を淫欲に染まった目で観察してながらそう口にする。
「殺った後も楽しめそうだ、あまり体は傷つけるなよ……。」
その言葉に便乗した一人が声を発した時、さっきまで目の前に居た筈にアカメがいつの間にか背後に移動していた。
「あ。」
「え?」
「お前達、敵地で余裕持ちすぎだ……。」
所作は一瞬故に何が起きたのそして何をされたのか、それに気づいた時にはすで喉を切られていた。
「そんな……。」
「速すぎ…る……。」
「クソッ!せめて相打ち…に……!?」

僅かな間をおいて三人の内の二人が倒れ伏せた、その様相を見ていた残りの一人は二人と同じように喉を切られていたが抵抗の意思は残っていた、だがその一人にも異変が起きた。

「傷口から呪……？毒……？」

アカメの刀で切られた傷口からいつの間にか流し込まれた呪毒が、彼の体を蝕んで心臓を止めるにはそこまで時間が掛からなかった。

「一撃必殺。」

獲物を鞘に戻したアカメは一人となった岸辺でそう呟いた……。

また別の場所でも静かにだが確実に戦いが始まっていた、それは森の中を賊の一人がひた走っていた時にもである。

『相手に侵入を気取られた！だがここにアジトがあるのは確定……！この情報だけでも莫大な価値がある……‼逃げのびて帝国に報告だ‼』

この国での移民系の人間の立場は劣悪と言っていい、差別は当たり前ながら時には奴隷の様に扱われ酷い場所では娯楽の為に殺されることも間々にではあったが存在した、彼もそう言った境遇から患者に身を窶したのかもしれない、だが理由はどうあれ彼らがナイトレイドに関わったのは悪手だった。

「かなり遠くまで逃げてるわ、アレを撃ちぬく為にはこうして姿をさらすしかないわ。」

狙撃手のマインが逃げる賊に標準を合わせる為、見晴らしのいい立地にその姿を見せた時だった。
「貰った！」
待ち伏せていた賊が躍り出て背後からマインを狙う、だが彼の背後にはシェーレがいた。
「すいません。」
人の胴体ですら両断できるほど巨大で鋭利な鋏が賊の体を上半身と下半身に分断する、そしてそれやった本人は感情の見えない目で譫言のように謝罪の意を口にする。
誰に向けられた謝罪だったのか、いや誰にも向けられてはいないのだろうもしかしたら、彼女が人を殺めた時に無意識に行ってしまう癖なのかもしれない。
「ありがとシェーレ。」
虚ろな目をしたシェーレに救援の礼を言ったマインは、背後に向けていた視線を前方に戻し標的を見定めた。
「ナイスピンチ、このリスクで充分届く……！」
不敵な笑みを浮かべたマインの持つ銃の先端にエネルギーが収束を始めると、その銃口から放たれたとは思えない圧倒的な太さの閃光が放射された。
「⁉なっ……。」

回避など不可能何処に逃げようとも直撃は免れない光波に狙われた賊は、辺り一面に生い茂る木々と共に灰も残さず消え去った。
「よし！命中！ピンチになる程アタシは強い！」
狙撃と言うよりは砲撃に近いかもしれない、それでもマインは得意気に笑うのだった。
「おっ！」
そして、その攻撃によって爆撃音が辺りに響き、賊の一人を始末し終えて一息ついていたレオーネの耳にも届いた。
「今のはマインのパンプキンか、よくあんな面倒くさい帝具使うな～その点こっちは、獣になって殴殺……分かり易い。」
整った顔に薄い笑いを浮かべ、殺った相手の血で汚れた手に力を籠めた。
襲撃者に回った者たちにとって追手を振り切る事は何より優先させなければならない、だが追手が後から来るもと高を括るってはいけない。
「う……ぐ……。」
ここは鍾乳石が氷柱となって天井から垂れ下がる洞窟の中、そこに糸に絡め捕られ自由を封じられた賊と思わしき少女がいた。
「糸の手応え、軽いと思ったら女の子かよ……まさか俺の所に来るなんてな。」

グローブからのびる糸を手繰って拘束を強めながら、ラバックが自身の運の無さを嘆く。
「お願い！助けて！なんでもするから！」
少女は必死な表情で命乞いをする、ラバックの言動から篭絡できる相手だと思ったのかもしれない。
「だーめ、色香に惑わされて死んだ奴を知ってるんでね。」
だがラバックもそう甘い男ではない、ナイトレイドと言う組織に居る以上彼も一流の殺し屋なのだ、少女は絡んだ糸が絞め上がりその体を傷つけながら首の気道を圧迫され止めを刺された。
「あぁ勿体ねぇ！こういう時、切ない稼業だよなぁぁ！」
死んだ事を確認すして拘束していた糸を戻すと、宙づりになっていた少女の亡骸が地面に落ちる、力なく横たわる遺体の顔を見遣ったラバックは、その心情をボヤキながらその場を去った。
ここまでで7人が討たれ残るは一人となった、それ知らないタツミはブラートに与えられた役割を果たすため身を隠していた。
【いいか……敵が逃げてくるとしたらここを通る可能性大だ、足止めでもいいから応戦しろ。】

そう言われ指定の場所で身を潜めるタツミ、平たく言ってしまえば見張り役である。
「いかにも新人の役回りだな、本当に敵なんて来るの……⁉」
ブラートの指示でこの場所を張ってはいるものの、その判断をいまいち信用できず疑問を口にしていた時、突然目の前に逃げていた最後の一人が現れた。
「ここにも人を配置していたのか！」
「通す訳にはいかねーな。」
ブラートの読みが当たり内心驚いたタツミだったが、それは向こうも同じ寧ろ逃げ切れると安心していた分その反動は大きい、相手の動揺した素振りを見て一転冷静になったタツミは剣を抜いて立ち塞がる。
『なんの恨みもない奴を斬るのか……だがここで迷えば……死ぬ。』
「少年といえど……手加減はせんぞ‼」
タツミの心に過ぎった一瞬の迷いは……獲物を抜き放った相手を見据えた時に露と消えた。
「あのイッセイさんの弟、タツミだっけ？死んだかしらね。」
アジトへの帰路の途中マインはふとタツミの話題をシェーレに振った、タツミに足して否定的な態度を見せていたマインはここでも辛辣な意見を述べる。
「問題ないと思いますよ。」

「めずらしいわねシェーレが評価するなんて、アイツがイッセイさんの弟だから？」
だがそんなマインとは違いシェーレは肯定的な返答を示した、その反応に少し驚いた普段何を考えてるか分からないシェーレだが、その性格は素直で思ったことを直ぐに口にしてしまう勿論それが悪い方向に働く事の方が多いが、逆にこういう場合は脚色の無い純粋な評価であると判断できた。
「それもありますけど、アカメと戦って生きのびてますからね。」
「まぁそれは確かにね。」
彼女たちにとってもアカメとイッセイは別格の存在だった、だからこそ一方の身内でありもう一方と相対しても存命していた事実はタツミに否定的なマイン認めざる負えない。
「それに……剣を交えたアカメが言うには、伸びしろの塊鍛えていけば兄を凌ぐ将軍級の器と……。」
その頃最後の一人と剣を交えていたタツミの戦いが賊に一太刀あびせる事で決着ついた、それはまるでシェーレの言葉と同調するようだった。
「……どうだ……これが……サヨと……イエヤスと……三人で……鍛え上げた剣技だ‼！」
感情の昂ぶりが発する声にも現れ倒した相手に、見栄を切り大声で言い放つ。

「頼むっ！見逃してくれ！俺が死んだら里が……！」
『コイツも故郷の為に？でも……。』
　タツミの実力を見誤り焦る賊は最後に苦し紛れで命乞いをする、故郷を救うために帝都まで出て来た彼はその境遇を知って僅かに躊躇う。
「ハハハ甘いな少年！一族の為に死んで貰うぞ‼」
　タツミが迷いの感情を見せた時、その隙を好機と捉えた賊が地面の落ちた刃を手に取り振りかざしたその時、頭上から現れたアカメに背中から刺され倒れ伏せた。
「迷うな……とどめは迅速に刺すことだ。」
『コイツ……顔色一つ変えずに……。』
　一体どれほどの修羅場を超えればこの表情が出来るのだろうか、今さっき一人殺すもの躊躇ったタツミは自身のあまさを悔やみアカメの冷徹さに戦慄した。
「トゥッ！敵がこっちに逃げてきただろう⁉後は俺に任せなっ！」
「もうおわった。」
「へ？」
　タツミとアカメの間に流れる緊張感が、ブラートの登場によって霧散しアカメもいつもの調子に戻る。
　侵入してきた族がすべて打ち取られると、各々に標的を追跡していたメンバーたちが

アジトに戻って来る。
「初陣ご苦労だったなタツミ。」
初仕事を終えて戻ってきたタツミを、ナジェンダが労いの言葉を送った。
「あ、ああ……。」
だが非常に成り切れなかったタツミは、覇気のない生返事を返してしまう。
「だが、アカメの報告を聞き不安なところもある、イッセイもその事を心配していたしな……お前が生き抜く為には、誰かに色々と教えて貰う必要があるとイッセイと話しあった、結論から言わせてもらうアカメと組んで勉強しろ。」
「いいっ!!」
ここには居ないがイッセイもタツミの事は気にかけている、それは有り難い事だが感情の読めないアカメに苦手意識があるタツミは顔を引き攣らせた。
「いいなアカメ。」
「うん。」
『アッサリ!?』
そんな表情のタツミの事を余所に、ナジェンダとアカメで話はまとまっていく。
「足手まといになる様なら斬っていいぞ。」
「うん分かった。」

『分かったのかよ！』

さらに追加事項として生死与奪の権限まで与えられ、タツミは戦々恐々である。

「可愛い子に教えて貰えるなんてついてるな、殺されない様に頑張れ！」

励ましにもならない脅迫を伴った激励に、タツミの顔色は悪くなる。

『この娘と……これから一緒に組むのか⁉』

ともあれ覚悟を決めなければならない状況に、相変わらず何を考えてるのか読めないアカメの顔を見つめこれからの事を案じるタツミだった。

殺し屋としての教訓～タツミの初仕事～

『軍でのし上がっていく為にも出来ることは増やしていきましょ。イッセイさんもやってた事だし。』

最初に言い出したのはサヨだった、彼女の意見でいつもの三人で料理の練習を始めた。

『食材に詳しければいざって時に兵糧切れでも凌げるしな。』

それに続いたのはイエヤスで故郷にイッセイが居た頃、彼の狩りに同行した時のよく狩った獲物の下処理を見学していた。

『サヨ……イエヤス……俺……料理できるようになってて良かったよ。』

そんな昔のことを思い返していたタツミは今……。

「「「おかわり」」」

『おかげで……すっかりコック扱い⁉』

アジトの食堂で炊事作業に精を出していた。

「くそーっ殺し屋なのにくる日もくる日も炊事かよ。」

アジトのメンバーが食事を終えた後、厨房にて次の食事の仕込みを始めていたタツミは不満を漏らす。
「仕方ない、私はアジトでは炊事担当だからな。私についてるお前も当然炊事担当になる。」
「味見や試食が無限だから炊事なんだな？」
タツミと会話しながらも食材をつまみ食いする手を止めないアカメに、切り出し方は質問口調だがほぼ核心を突く。
「そんなことはない。」
「説得力ねぇよ。」
口では否定しているが即座に口に食物を頬る仕草で語るに落ちており、タツミがその様子に冷静なツッコミを入れた。
「やっぱり新入りにはその姿が一番サマになってるわね。」
「何ィ!?ってアレ？皆どっか行くのか？」
今の彼の姿をなじり小馬鹿にした様な口調の言葉に、反射的に反応したタツミが声のした方に体を向けると余所行きの服を着たマインを含めたメンバーたちが佇んでいた。
「ええ、依頼が来たから帝都で殺しよ。」
「依頼？」

『そういえば……。』

マインが帝都でこれから仕事をしてくると得意げに語る、だが要領を掴めないタツミは一瞬首を傾げナジェンダに言われていたことを思い出す。

『我々は表向きには帝都民からの依頼によって暗殺を行う組織で通っている、その方が何かと都合が良いんでな。』

タツミはいち早く状況を飲み込みナイトレイドを取り巻く環境に慣れる為に色々な雑事を手伝い始めていた、確かその時は手伝いが終わり一息入れていた時だったから生返事を返していた気がする。

『ちゃんと聞いているのかタツミ？いずれお前も依頼を受ける事になるんだ気を引き締めておけよ。』

その場に同席していたイッセイからの叱責に顔を顰めて、その時は後に続いた言葉を流して聞いていたが今思い出すとアレは兄からの注意喚起だった。

「留守は宜しくお願いします。」

「え、俺は？」

シェーレから留守を頼まれ、自分にもお呼びが懸かってないかを聞き返したタツミ。

「新入りとアカメは留守番！キュウリのヘタでも落としてなさい！」

『なんで必要以上に威圧的なんだコイツは……。』

何かとタツミに突っかかるマインは居切った口調で彼を挑発する、それはまるで猫が自分の玩具で遊ぶのと同じ理由なのだが、精神的に未熟なタツミにはその真意は図りかねた。
「じゃあねー。」
「ぐぬぬ！」
タツミを弄って要を達したマインがそう捨て台詞を残し上機嫌で厨房を後にする、マインの後姿を恨めしそうに見つめ苦渋の声を漏らすタツミ。
「……よしっ、じゃあ次は私達も命を奪いに行こうか。」
「炊事班の狩りってオチですね、分かります。」
不満げなタツミの様子見たアカメが何を考えたか知らないが食材の調達を遠回しな表現で言い表し、タツミはさっきまで腹立ったしさから一転して遣る瀬無い感情のツッコミを入れる。
アジトを出たアカメとタツミは拠点から離れた山の中の奥地へと進んでいた。
「なあ、アジトから結構離れてるけど大丈夫か？」
アカメは組織の中で顔と名前がわれている、それなのにアジトから離れて出歩く事にリスクはないのか気になり質問した。
「山奥に行く分には問題ない。」

そして帰ってきた返答がこれだった、確かにここは辺境の山の中だ人目はあってないような物、万が一人に見られても身を隠せる場所など幾らでもあるし、周囲の警戒を怠るなんて真似はプロの暗殺者がする筈がない。

『……間がもたない。』

「着いたぞ。」

その後は特に会話らしい会話もなく山道を歩く靴音だけが流れる気まずい空気が流れたまま、目的の滝の流れる清流に辿り着いた。

「へぇーっ、キレイな所だな。」

「川の獲物を葬る。」

風景の素晴らしさに感心に素直な感想を話すタツミ、そんな彼をマイペースなアカメは気にする事もなく上着を脱ぎながらそう伝える。

『⁉まさか全裸で……。』

思春期の少年の様に純粋な煩悩を持つタツミは、風景に見とれていた事も忘れアカメの方に熱い視線を送る。

「この水の中で動きやすい服で……。」

『なんだ……。』

上着のしたに水着を着こんでいたアカメに、若干ガッカリした様な安心した様な複雑

な心境のタツミ。
「狙いはコウガマグロ、ここはポイントだ。」
　勝手な期待で盛り上がり勝手に消沈して冷静になった少年の心中を知ってか知らずか、ここに来た目的と捕獲する食材を伝える。
「ん？それは兄貴に捕る方を教えられたな……警戒心が強いから中々捕れなかったけどコツを掴めば簡単だったな。」
「そうか、なら説明は不要だな。」
　そう言って川の中に飛び込み数秒後川面から１０匹程のコウガマグロが討ちあがり籠の中に納まっていく。
「スゲーけど、前に兄貴が倍取ってを見たことがあるからなぁ～あんま驚けねぇや……。」
「ふむ、やはり副長ならそれ位はやっているのか。」
　水面から上半身を出したアカメが表情事態は変わってないが、気落ちした様に思える声音で話した。
「それで出来そうかタツミ？」
「あぁ……兄貴に様に出来ないかもしれんが一応やれるぞ。」
　それでも即座に切り替えてタツミにそう尋ねたアカメに、特に気負った様子もなく上

着を脱いで水中で潜っていった。
「で……そう言ってアカメより三匹多く捕らえてと……流石はイッセイの弟と言うことか。」
「うん……何だかんだ言って、副長の血統ってすごいんだね弟くん。」
「負けた……。」
アジトでの夕食時、ナジェンダとレオーネの二人が落ち込むアカメにどう反応していいか困惑しながらタツミの能力の高さを改めて評価していた。
『アカメでも落ち込む事ってあるんだな……なんか親近感が湧いてきた。』
表情は相変わらずだが虚ろになった目でマグロの頭を注視するアカメに、僅かではあるがタツミの中のアカメとの心的距離が縮まった。
「レオーネ、数日前帝都で受けた依頼を話してくれ。」
「!」
さっきまでの場の空気が急に張り詰めたものに変わり、その場に居た全員の目が鋭くなる。
「標的は帝都警備隊のオーガと油屋のガマルって奴よ、依頼人が言うには……。」
ナジェンダに話題を振られレオーネは、徐に依頼人との邂逅時の状況を語り出した。
【オーガはガマルから大量の賄賂を貰ってるんです。】

依頼者の女性の静かで悲痛な言葉が密会場所となった墓地に陰鬱な影を落とす。
『周囲に第三者の気配は無いな、副長は……ここ以外で隠れてる人影も無しか。』
【続けて。】
目の前の依頼人が国の回した囮ではない事を確認し、この場を遠くから見張っているイッセイからも怪しい様子が無い事を伝えられ、女性に会話の続きを促した。
【ガマルが悪事を行うたびに代理の犯罪者をオーガによってでっち上げられるんです。私の婚約者も濡れ衣を着せられ死罪になりました。】
淡々と感情を押し殺した声で真相を語る女性は、その表情を苦悶に歪めて声音以上にその心情の無念さを語る。
【あの人は牢屋で二人が密談を聞き、処刑前に手紙で私に知らせてくれたんです。どうか、どうかこの晴らせぬ恨みを……！】
身に覚えのない罪を着せられ非道にも殺された愛する人への想いと、本来罪を背負い罰を受けるべき人間が今も天道の下をのうのうと歩いている事への憤りや恨みが合わさった、表情に表せぬ程に渦巻いた怨嗟に苦しむように蹲り絞り出した切なる願いが辺りの空気を震わせた。
言葉もなく悪に対する静かな怒りがレオーネの瞳を冷酷な殺戮者の色を見せた。
【……分かった、そいつ等地獄に叩き落してやる‼】

【ありがとうございます!!ありがとうございます!!】

背を丸め悲壮の感情を周囲の溶かす女性の苦しみを少しでも和らげようと力強く宣言すると、彼女は礼の言葉と共に何度も頭を下げていた。

「これがその時の依頼金だよ。」

小さな麻袋いっぱいに詰められた金銭がその質量以上に込められた想いを体現する様な鈍重な音を立て卓の上に置かれた。

「俺がここに来た時と同じ位か?その人、よくこんな溜められたな。」

「依頼者から性病の匂いがしたんだ……きっと体を売り続けて稼いだんだろうね。」

タツミが故郷から帝都に来るまでに稼いだ軍資金と同額はあると麻袋の大きさから目算し、自分があれだけ稼ぐのに割いた労力を鑑みても並ではない時間が懸かった、無論イッセイ仕込みの戦闘指南を受けた事も実力を加味した上での計算だが、それと同等額を女性が身一つで作り出せた事に驚いていると、レオーネが感情の籠らぬ単調な口調で依頼料を稼ぎ出したと思われる方法を告げた。

「!……そんな。」

「事実確認は?」

「有罪だね、油屋の屋根裏部屋にいて断定できたよ。」

レオーナの告げた事実に衝撃を受け意気が沈んでいくタツミ、そんな彼の脇に置いて

ナジェンダは依頼の信憑性を問うと、レオーネは紛れもない事実であると返した。
「……よし、ナイトレイドはこの依頼を受ける。」
　ここまでレオーネの報告を聞いていたナジェンダが、僅かな思案を挟み受諾する判断を下した。
「悪逆無道のクズ共は新しい国にはいらん、天罰を下してやろう。」
　後に続く言葉にはナジェンダの意思もあるが革命軍の一員としての判断も含まれていた。
「ガマルを殺るのは難しい事じゃないね、問題なのはオーガの方だけど……。」
　通称鬼のオーガ、イッセイ亡き後新たに鬼と呼ばれるようになった兵士であり、そう呼ばれるだけの実力は有り剣の腕は犯罪者達を恐怖させる分には十分であるとされ、普段は多くの部下と見回りに出ておりそれ以外は警備隊の詰め所で過ごす、賄賂などの受け渡しは自室で今回の標的のガマル等を呼んで行っていて、非番の日は役目柄詰め所を離れる訳にもいかず宮殿付近のメインストリートで飲むことがほとんどだそうだ。
「実行は非番の時にしか無理そうだな。」
「……だが宮殿付近の警備は厳重だ、指名手配中のアカメに頼むのは危険だな、イッセイの方も伏せて置きたい。」
「マイン達が戻るのを待つのは？」

集められたオーガの情報を鑑みて発言するタツミ、だが標的の行動範囲ではアカメが見つかるリスクもあイッセイに任せても仮面とローブで顔と体を隠しているとはいえ正体がわれる可能性もある、今で出払ってるメンバーの帰還を待つのも手ではあるが。
「でもアイツ等いつ仕事が終わるか分かんないんだろ？」
「うん」
いつ戻るか判断出来ないメンバーを待ち、その間に被害者を増える可能性も大なのだ。
「だったら、俺達だけでやり遂げようぜ！」
かの悪党たちを放置していてもいい影響が出て来る筈もないなら、この期を逃す事は無いとタツミは奮い立つ。
「ほう……お前がオーガを倒すというのか？」
「え？」
タツミの宣言から意地の悪い笑みを浮かべたナジェンダ、確かに言葉の意味的にはそうも聞こえるが。
「ちょっボス！まさか弟くんに殺せる気ですか⁉幾ら弟くんが副長の身内だったとしても、最初の相手がオーガなんて危な過ぎます⁉」
それをレオーネが慌てて仲裁し引き留めようとする。

「ほらアカメも止めるように説得して！」
「……いいんじゃないか、今日の事でタツミの今の実力に興味が湧いた。」
　アカメにも同意を求めようとするレオーネだが、当のアカメはナジェンダと同じ考えを示す。
「アカメ⁉あぁもう！弟くんも真に受けなくいいからね？私は顔が知られて無いし、慣れてるからさ。」
　同意してもらえると踏んでアカメに声を掛けた筈がまさかの容認の回答だった事で、焦るレオーネは最終手段としてタツミ本人の説得に移る。
「心配してくれてありがと姐さん……でも俺、やるよ。」
　自分を心から心配して言ってくれてる忠告であると理解している、だが依頼者の事情を知った手前ここで引くことはタツミの性格上出来ない事を彼の表情が特に目がものがたる。
「っ！……はぁ～なんて目をしてるのさぁ、そんな顔されちゃ私もこれ以上なにか言っちゃ野暮になっちゃうじゃない。」
　そんなタツミの覚悟を受けてはレオーネが折れるしかない、諦めの溜め息を吐き出し困ったように表情を崩して笑みを見せる。
「決まりだな、お前の意思を汲み取ろうオーガを消せ。」

タツミ自身がオーガを引き受ける事を同意した事で、ナジェンダは彼の見せた決意を認めて一任し話を締める。
「レオーネとアカメは油屋を頼む。」
「分かった。」
「はいはい、あぁ～ホントに如何してこうなったかな～?」
残っもう一人の標的の油屋のガマルにアカメとレオーネの二人を宛がい、了承するアカメと一応の納得は示したもののまだ心配が残るレオーネは不満を溢す。
「……タツミ。」
「なんだよアカメ?」
任務に向けて各々が其々に違った心境を抱く中、アカメに声を掛けらるタツミは彼女に向き合た。
「任務では最後まで気を抜くな、目的を着実に遂行し報告すま所まで行って任務は成功と言える……健闘を祈っている。」
「っ!おう!」
彼の作戦参加を賛同した手前ではあるが忠言だけはした方が良いと思い彼の心構えを説くと最後に激励の言葉を送る、その言葉にタツミは気を引き締めつつも確り答えた。

そして任務結構の日帝都の中心部へ続く立派な陸橋を目の前に望む橋の入り口に、タツミとレオーネ二人の姿あった。
「ここを真っ直ぐ行けばメインストリートだよ。」
「分かった、ありがと姐さん。」
初となる本格的な任務へ参加を前に少しばかり興奮するタツミ、そんな彼に思う所があるのかレオーネは独りでに語り出した。
「……弟くん、仕事の前に聞いておいて欲しい事があるんだ。」
「ん？」
レオーネの語り掛けに興味を持ったタツミは聞き耳を立てる。
「アカメには生き別れになった妹が居てね、子供の頃に姉妹揃って帝国のある機関に買われてたんだ。」
タツミの育った村ではレオーネの言いった人身売買は無かったが、他の地域だと貧困層の家では良く自分の子供を売りに出す親が居る事をタツミも聞いたことがあった。
「その機関ではアカメ達と同じ境遇の子供たちが集められていて、暗殺者の育成が行わてたの……殺しの教育を受けながら過酷な状況を耐えて生き延びてたんだって。」
言葉にするのも憚られる程凄惨を極めた鍛錬は、教育と言うよりは調教に近かったとアカメは回想したそうだ。

「そんな日々を過ごしていく内に帝国の命を従順にこなす一人の暗殺者としてアカメは形付けられていったんだ。」
帝国に反目の意思のある者たちを人知れず消していく、その為だけの存在だった嘗てのアカメは当時から優れた能力を持ってい。
「でもさアカメは任務をこなしていく内に帝国の闇の部分を察して、当時標的として相対したボスの説得を呑んで帝国を離れ本当に民衆の為を思う革命軍に付いたんだって。」
「……。」
アカメ本人の口からは決して話されない彼女の過去を黙って聞き入る。
「そこに至るまでに一緒に過ごした仲間は殆ど死んでしまったんだけど、今でもそれついて思う所があるんだって。」
そこで一旦アカメの内情についての話を区切ると、レオーネはタツミの向き合った。
「川での事でタツミへの認識を改めたみたいだけど、それでも油断した端から命を落とす世界だから気を張ってほしいんだよ。」
「分かったよ……兄貴に稽古つけて貰ってた頃も慢心は己を殺すって言われたしな、気を引き締めるよ。」
レオーネには今回が急に初仕事となったタツミが少しばかり浮かれてる事を気にし

ていた、そしてその事をそれと無く伝える、タツミに無事任務を完了させ戻ってきて欲しいから自分の為と彼を推挙したアカメの為に。

それを感じ取れない程タツミも鈍くない、何より兄の狩りに同行していた時期は調子に乗って命を落としかけた苦い経験もあったりして、その都度イッセイからは注意を促されて来た。

だからこそ気は抜けない、ここは帝都人の街だが暮らしている奴らは危険種より厄介な悪鬼の巣窟、気を抜けば死よりも辛い地獄が待つそんな場所だと思い直し獣の嗤う魔窟もとい帝都へと入っていく。

ここは帝都の歓楽街の一角のひと際目を引く豪華な佇まいの遊女屋、中庭に沿う廊下を一人背が低い頭の禿げた男が薄ら笑いを浮かべて遊女の元へ向かっていた。

「ふいーっ!トイレですっきりしたことだし、またイカせて貰おうかのう。」

操の後の一息を終えまた快楽を貪ろうと卑下た笑みで口元を歪める男の、その要望は残念ながらかなえられる事は無い何故なら……。

「ああ……逝かせてあげるよガマル。」

もう既に彼の背には死神が張り付いていたのだから。

「あっ!」

背後からレオーネが首を抑え込み声を上げられないように気管を圧迫して、天井裏に

隠れていたアカメに心臓を一突き。
「ぅっ！」
流れるような連携で抵抗する事はおろか大声を上げる暇すら無く、ガマルは低く短い呻き声を最後に絶命した。
「美少女二人がかりで落とされるなんて幸せ者め！」
ガマルの亡骸を見下ろし多分に皮肉を含めた言葉を吐き掛けるレオーネ。
「さて……あとは弟くんの無事を祈るだけだね。」
「心配ない。」
一仕事を終えたその場で気を緩めたレオーネは単独で難敵を引き受けたタツミに思案を向け、消えぬ懸念をまた口にする、だが相方のアカメはその心配は杞憂であると返す。
「レオーネ私がなぜ、タツミにオーガを任せる事を止めなかったと思う。」
「……それもそうだね、いつもなら頑なに否定し続けるのに？でも今回は終始賛成してたよね……なんで？」
アカメは普段新たなメンバーを迎える際は最初は否定と拒絶を示し決して入れ込む事は無い、だがタツミに関しては違ったのだ彼に強敵を宛がう事に難色を示すどころか賛同までした、これは確かに異例な事だし今までにない事例でレオーネもそこは気に

なっていた。
「コウガマグロを捕る時に見ていたんだが、あいつは獲物を見つけてから狩るまでの間一時も気を乱さなかった、確実に仕留めきる所まで例え獲物が目の前に迫った一瞬でもだ。」
「っ！……イッセイさんが狩りをする時と同じ、気配を殺し殺気を隠してじっと時を待つ。」
　危険種の狩猟の時それは自分が獲物を狩るか自分が獲物になるか生と死が懸かった勝負の時、束の間の一瞬その一瞬が生死を別け命を奪うか奪われるか、如何に屈強な戦士であろうと経験豊富な射主であろうと集中力が途切れればそこから全てが崩れる、故に優れた忍耐力が必要でありそれは暗殺も同じ殺った思い込んで気を抜いたが最後対象からの反撃で命を落とす。
　アカメは川での狩りでタツミの忍耐力を見た結果、彼になら強敵を当たらせても問題ないと判断したのだ、そしてアカメの意図に気が付いたレオーネは改めてタツミの潜在能力の高さに息を呑む。
　その頃、帝都のメインストリートでは暗殺対象のオーガが気持ちのいい酔いの余韻を楽しんでいた。
「ウィーーッたっぷり尋問した後の酒はうめぇや。」

裏で如何なる悪事に手を染めようと表の彼は町を守る警備隊の長、一般市民からすれば立派に仕事をこなす役人であると疑う者などいなかった。
「オーガ様!」
「あん!」
そんな立派な役人であり相当な権力を持つ彼の元には様々な人間が近づいてくる、例えば彼に声を掛けた人物たちの様な。
「おつとめご苦労様です。」
「先日はお世話になりました。」
二心を隠しけれていない歪な笑みを顔に張り付け胡麻を摺るよに手を重ねた商人たち、彼らもまたガマルと同様に彼に賄賂を贈り自らの罪を他人に擦り付けた俗物達である。
「おう、困ったことがあったらいつでも言ってこい。」
その彼らの遜った態度に満足気な表情で、役人にあるまじき言動をほざく。
『この街じゃ俺が王様よ……!権力最高!やりたい放題だぜ!』
彼は我が世の春を謳歌するが如く自身の権力を使い暴利を働いて得た立場に満足していた、だからこそ裁きを受ける時の音がすぐそこまで近づて来たのだ。
「……あのう、オーガ様。」

「あん？」
　上機嫌のオーガの背後から若い男の声がし声のした方に顔を向けた、そこにはフードを目深に被った怪しい雰囲気若い男が意味深な表情を浮かべていた。
「ぜひお耳に入れたい話があるんですが……。」
「なんだ……？言ってみろ。」
　男の様子を怪しみ片手を剣に伸ばしながら、その場で相手に話を促すオーガ。
「表ではちょっと……路地裏でお話出来ませんか？」
　しかし件の男は、ここでは話し難いと言い仕方なく人通りのない路地へ移動した。
『人の気配はねぇな……。』
「オラ、ここならいいだろ。」
　周囲に潜伏している人の気が無い事を見計らい、男から話を切り出すのを持つ。
　そして、オーガに向き合った男ことタツミは一世一代の勝負に出た。
『サヨ……イエヤス……俺に力を貸してくれ！』
「お願いします!!俺を帝都警備達に入れてください！」
　心の中で今は亡き戦友二人名を呼びながら平伏して懇願するフリをしたタツミ、その必死に見える様相に一瞬で緊張が解かれ気が抜けたオーガ。
「金を稼いで田舎に贈らなきゃならないんです。」

「ハァ……んなことだろうと思ったぜ、正規の手順を踏んでこいボケ！」
立て続けて情けない泣き言を話すタツミに、完全に興が削がれたオーガは彼を突き放すように厳しい言葉を吐き立ち去ろうとタツミに背を向けた。
「……ですが、この不景気では倍率が高すぎます。」
背後を見せたオーガの無防備な姿を好機と見たタツミは、後ろの腰に隠した愛用の剣に手を伸ばしゆっくり抜きさる。
「仕方ねぇだろ、お前が力不足ってこったな。」
タツミの纏う雰囲気の変化に気付いたオーガも、腰の横に帯剣している剣の柄を握り抜き放とうと構え刹那の間。
『……迅ぇ‼恐れを知らぬ思い切りの良さ、まさかこの俺様に歯向かう奴がいるとは。』
気が付けばオーガは視認する間もなく斬られていた、その斬撃の速さに驚きの感情を浮かべながら前のめりで倒れる、だがそれでもスイッチが入ったタツミは気を抜かない。
『……今のは浅かった、まだ立つな。』
オーガを切った感触が浅いと感じ背を向けたまま、剣を体の横に構え手を添えて足を踏ん張らせると予想通り重い衝撃が柄を持つ手に伝わる。
「っ！……俺が……このオーガ様が……手前ぇみてぇなクソガキに殺られるかよ……。」

完全に決まったと思った奇襲を受け止められ多少動揺した様だが、それでもオーガの怒気を込めた一撃はタツミの体を後ろに流した。
「弱者が何うめこうが関係ねぇ……強者がこの街じゃ絶対なんだ……俺が裁くんだよ‼俺が裁かれてたまるかあ‼」
「……。」
身勝手な言い分を怒りのままに叫ぶオーガ、そんな相手を前にしても狩りのモードのタツミは涼しい表情で飛び上がる。
「随分よく回る口だな、俺の知る一番強い男は戦い間は無口になるんだがな。」
「何⁉墳‼」
頭上から放たれる斬撃を受け止めそのまま地面に抑え込むオーガを、表情を変えないタツミはそう呟くと更に感情を昂ぶらせる。
「太刀筋も単調で力任せ……クソガキの俺ですら受け止めきれる程度の技量で鬼の渾名か分不相応だな。」
「うるせぇ!……そうかぁ、さてはお前ナイトレイドの一味だな?」
更にオーガの剣の腕にもケチが付けられ怒りの感情が頂点を過ぎると、一転して頭が回り出したのかタツミの正体に気が付きだす。
「一体誰の依頼だ?心当たりは山程あるが……最近だと、この間殺った奴の婚約者か?」

「……だったら？」

オーガの戯言を聞くのにも早くも飽き始めたタツミは、呆れの籠った心情を短い言葉で言い表す。

「当たりかぁ……やっぱりあの女も、あん時殺っときゃ良かったなぁ……いや……今からでも遅くはないか！まずはあの女を探し出し、女の親兄弟を重罪人に仕立て上げて女の目の前で皆殺しにしてやる……！」

『哀れな奴だなオーガ……自力でそこまで地位を得っておいて、弱者を虐げる事にしか発想がいかないとは……。』

下衆を極めた男の表情とセリフは画くも醜く悍ましい物なのかと、口を閉ざしたタツミはオーガを哀れにすら思った……その後に続くセリフを聞くまでは。

「手前ぇを殺った後になぁ……!!」

「っ！随分易く見られたもんだ……。」

タツミがそう呟いた後、彼を抑え込んでいたオーガの量腕は二の腕から先は斬り飛ばされた……。

「なっ……。」

唐突に消えた腕の先を見つめ脳の処理が追い付かないオーガが間抜けな顔を見せた時、タツミは宙に舞い体を捻じり剣を這わす。

「……やはり、口だけの男に鬼の名は過ぎたものだったな。」
そこから俊撃と呼ぶに相応しい早業で切り刻まれ声を上げる間も与えらずに屠られ、仕事を終えたタツミはアジトへ帰投した。
「強敵の始末ご苦労だったな！見事だ！」
「……。」
アジトに帰り任務の結果報告を済ませたタツミを、ナジェンダは労うが彼は何とも言えない表情を見せた。
「どうしたタツミ？」
彼の表情が気になり若しや、何処かやられてはいないかと聞いてみると……。
「標的……鬼と呼ばれてる男だどんな奴かと思ったら、力が強いだけの俺以上の未熟者だった……あれで隊長を任されるなら警備隊の実力の程度も知れる。」
「は？……え！」
吐き捨てられた言葉に一瞬疑問符が浮かび、数刻の反芻した後驚愕の表情を浮かべる。
「あの……弟くんキャラ変わってない？」
「……すいまない姐さん、狩人モードは余韻が長いんだ。」
普段の彼と今の彼の性格的なイメージが合わず思わず聞いてしまったレオーネに、事

も無げに返すタツミは涼しい表情のままだった。
「……タツミ。」
「アカメか如何した?」
　いつもと違うタツミの様子に困惑する二人を余所にアカメは声を掛ける、それに気が付いたタツミが落ち着いた声で応じる。
「服を脱いでくれないか、怪我をしてないか見たい。」
「……分かった、ちょっと待ってってくれ。」
　アカメの要望に応え上着を脱いで無傷である事を見せると、下の方もと視線で促され仕方なくズボンも脱ぐ。
「これでいいか?」
「あぁ、良かった。強がって傷を報告せずに毒で死んだ仲間を見たことがある、ダメージがなくてなによりだ。」
　下着だけになったタツミは爽やかな表情でアカメに要望に叶ったか聞くと、これまで固かった表情を解し柔和な笑みを見せた。
「……心配をかけたみたいだな。」
「いや、初めての暗殺は死亡率が高い……見込みはしていたがよく乗り越えた!」
　互いに清々し気な表情で握手を交わす、そんな彼らを遠巻きに見ていたレオーネとナ

ジェンダ。
「弟くんの狩人モードって、やっぱり副長の影響なのかな？」
「恐らくは、イッセイが言っていたがタツミ……あいつの底は見えないな。」
　二人が話すタツミの際限のない潜在能力、イッセイ曰く狩人モードとはその眠れる力が部分的に発現したものと言う弁を思い出しながら、二人は語り合う。
「これからも生還してくれ……タツミ。」
「ああ、これからもよろしくなアカメ。」
　同じ組織の仲間として認め合うタツミとアカメ、それを遠巻きに見守るレオーネとナジェンダ、同じ空間で二組の間に温度差が生まれていた。
「弟くん、感動的な場面を壊すようで悪いんだけどいい加減服着ない？」
「え？あ……。」
　どうもその温度差に耐え切れなかったのか、レオーネが客観的に突っ込みを入れ場の空気が入れ替わると共に狩人モードの余韻も終わった。
「……よし、じゃあ次はマインの下について頑張ってみろ。」
「……え〝っ⁉
　何かを思案したナジェンダが唐突にタツミに次の指令を告げ、その内容に言葉を詰まらせる。

「アッハハ……一難去ってまた一難かぁ～。」
レオーネも苦笑いしてタツミの同情の視線を送る。
「あ……あいつですかぁー？」
気の乗らない間延びした声で次に指名された猫の様な少女の顔を思い浮かべた時。
「何か悪寒がするするわね……。」
向こうも不穏な気配を感じ取っており、ある種宿命めいた縁があるのかもしれない。